十勝沖地震に伴う厚岸町床潭地区の津波被害聞き取り座談会記録

北海道 厚岸町
厚岸町教育委員会



目　次

１　はじめに　----------　１
２　座談会参加者と地震被害の概要　----------　２
３　昭和27年（1952）3月4日発生の十勝沖地震について　--　３
４　床潭地区航空写真　----------　４
５　地図と写真の撮影位置関係　----------　５
６　座談会記録　----------　６
７　＜資料１＞厚岸町史聞き取り調査記録（平成13年8月）-----　５３
８　＜資料２＞海岸線の特徴及び地名　----------　７４
９　＜資料３＞床潭地区地形図及び当時の番地 ----------　７５
１０　＜資料４＞床潭小学校開校80周年「八十路の歩み」より ---　７６
１１　＜資料５＞昭和２７年当時の生活について　----------　７７
１２　＜資料６＞町報あっけし（昭和２７年３月）　----------　７９
１３　＜資料７＞十勝沖地震の記憶（床潭地区児童・生徒の作文）-　８１

はじめに

厚岸町教育委員会教育長　酒井 裕之

昭和２７年に発生した十勝沖地震は、当町の床潭地区の一部が壊滅状態となり、死者も発生する甚大な被害をもたらしました。

当町ではその後も幾度となく大規模な地震に見舞われましたが、平成２３年に発生した東日本大震災では、再び最大２．７mの津波が押し寄せ、人的被害こそなかったものの、海岸線付近の民家や公共施設の床上浸水のほか、漁業施設等に甚大な被害が発生し、津波は本当に来るんだという住民の意識が変わりました。

これを機に改めて町民の防災意識と避難対応向上の必要性が認識され、今後の課題として、「自分だけは大丈夫」「津波は来ない」という意識を転換する必要があります。

近年地震に対する調査が進み、今後３０年以内に震度６弱以上の揺れが起こる確率を示した全国地震予測地図の2018年度版が公表され、前回の１７年度版と比べ釧路が47%から69%に上昇するなど、道東地区を中心に大幅に確率が上がりました.

これは東日本大震災を踏まえて評価方法を見直し、複数の震源域が連動し、マグニチュード９クラスの「超巨大地震」が起こる可能性が初めて示されたものです。

今後起こりうる災害を最小限に抑えるためにも、当時の津波被害が風化することのないように、当時の地震経験者による座談会を通して記録を残し、津波被害の状況と教訓を後世に伝えることに繋がれば幸いです。

昭和２７年３月４日発生の十勝沖地震に伴う座談会参加者と地震被害の概要

■参加者

＜当時被害に遭われた床潭地区住民＞

高島　昭 氏　／　多田　勝義 氏　／　遠藤　弘 氏　／　高畠　キエ 氏

＜座　　長＞

室﨑　正之 氏（写真提供者、町史編さん審議会長）

＜町史編さん審議会委員会協力員（オブザーバー）＞

黒田　庄司 氏　／　米内山法敏 氏　／　髙橋　敏晴 氏（町史編さん室）

＜厚岸町役場＞

国井淳一郎（総務課危機対策係）

＜厚岸町教育委員会・海事記念館＞

三浦　博哉　／　車塚　　洋　／　熊﨑農夫博　／　前田　芳和

■座談会日時・場所　　平成30年4月25日（本の森厚岸情報館）

■ 写真情報

- 昭和27年3月6日撮影（撮影者：元厚岸町議会議員　故室﨑喬介氏）
- 写真撮影の状況

  地震発生後、床潭地区で厚岸町議会の臨時議会が開催され、その際の現地視察時に撮影されたもの。
- 写真は、本の森厚岸情報館で複製画像を所蔵、公開。
- 写真下の点線枠は故室﨑喬介氏の写真撮影時のメモを付したもの。





左から（床潭住民）遠藤弘氏、高畠キエ氏、高島昭氏、多田勝義氏、（座長）室﨑正之氏

昭和27年（1952）3月4日発生の十勝沖地震について

【 被害状況 】

■昭和27年３月４日、午前10時23分、十勝沖（北緯42° 09′、東経143° 52′）で発生。

M8.2、最大震度５、大津波を伴った。

■十勝沖地震全体での死者・行方不明者33名、負傷者287名。

■厚岸町では、床潭地区が特に被害が甚大で、津波は５m以上、内陸へ約400m遡上。

死者２名、重傷者４名、倒壊家屋37戸、床上・床下浸水約100戸

この他、漁船の流出・破損などあり

データ出典：十勝沖地震調査報告（1954年十勝沖地震調査委員会発行）

【 地震・津波の状況推移 】

■昭和27年３月４日、午前10時23′ 地震発生。

■厚岸では、地震発生後、数ヵ所で小火（ぼや）があり、消防団が出動。

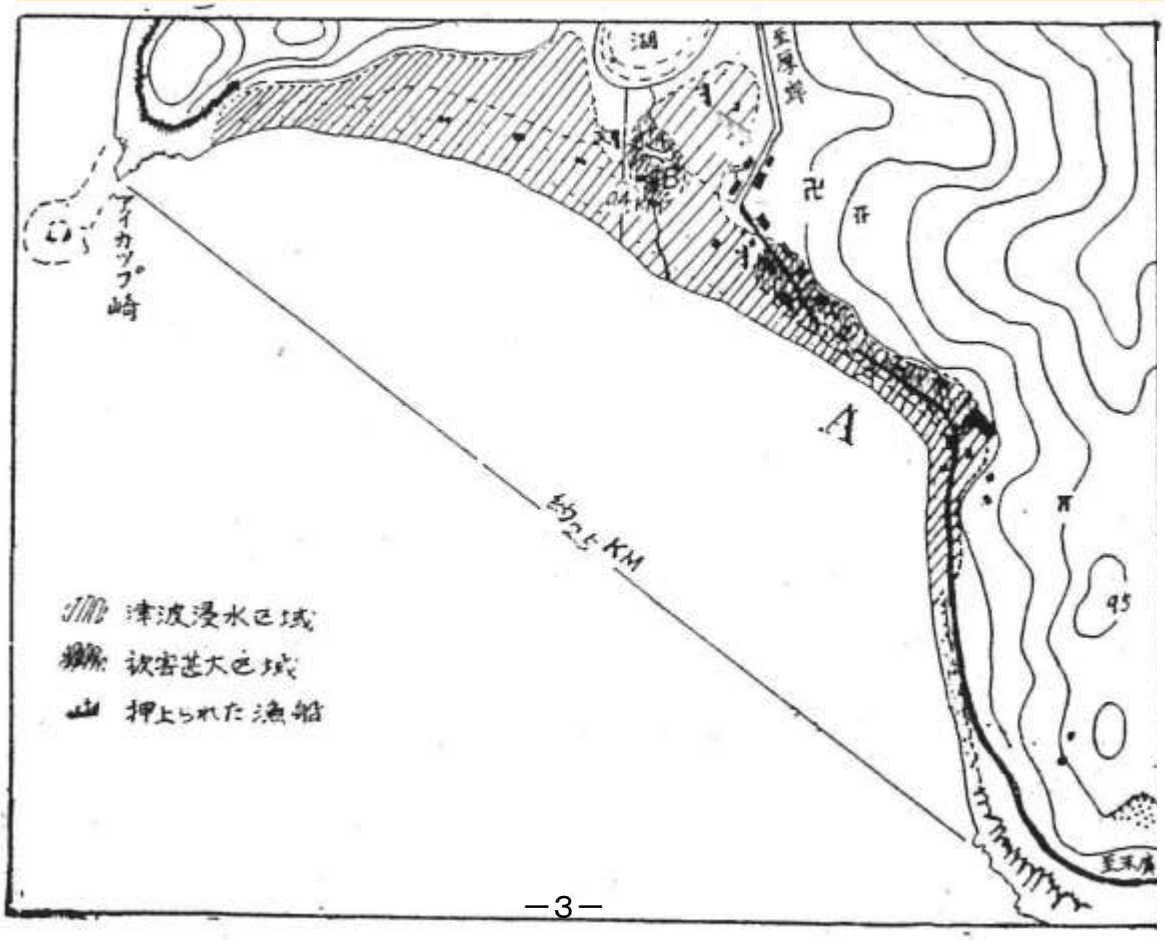
■床潭郵便局長より、役場に電話連絡あり。津波が迫っていた。

■町立厚岸病院の医師や役場職員を乗せたトラックが床潭地区へ向う。

■正午には、厚岸町災害対策本部を設置。

■民生委員協議会が町内有志に呼びかけ寝具の寄附を募り、午後４時には床潭地区に届ける。同時に、米十俵・調味料・毛布なども届き、炊き出し開始。

■翌５日には、義援金の募集や消防団、青年団による被災地の整理作業も開始。



『十勝沖地震調査報告』十勝沖地震調査委員会、1954年



上：厚岸町広域／下：床潭地区全体　（写真Google）



地図と写真の撮影位置関係



床潭上空　（写真Google）

①　地震発生直後の厚岸町議会現地視察の様子



時を移さず岸田町長以下並に町議会議員は余震未だ収まらず不安心裡に現地調査に入った

快晴雲一つなく、なぎさに啼く白い鳥の姿も徒らに此の惨状をみる時、天の無情に嘆ぜざるを得ない（床潭小学校附近にて）



【室﨑】

本日は宜しくお願いいたします。

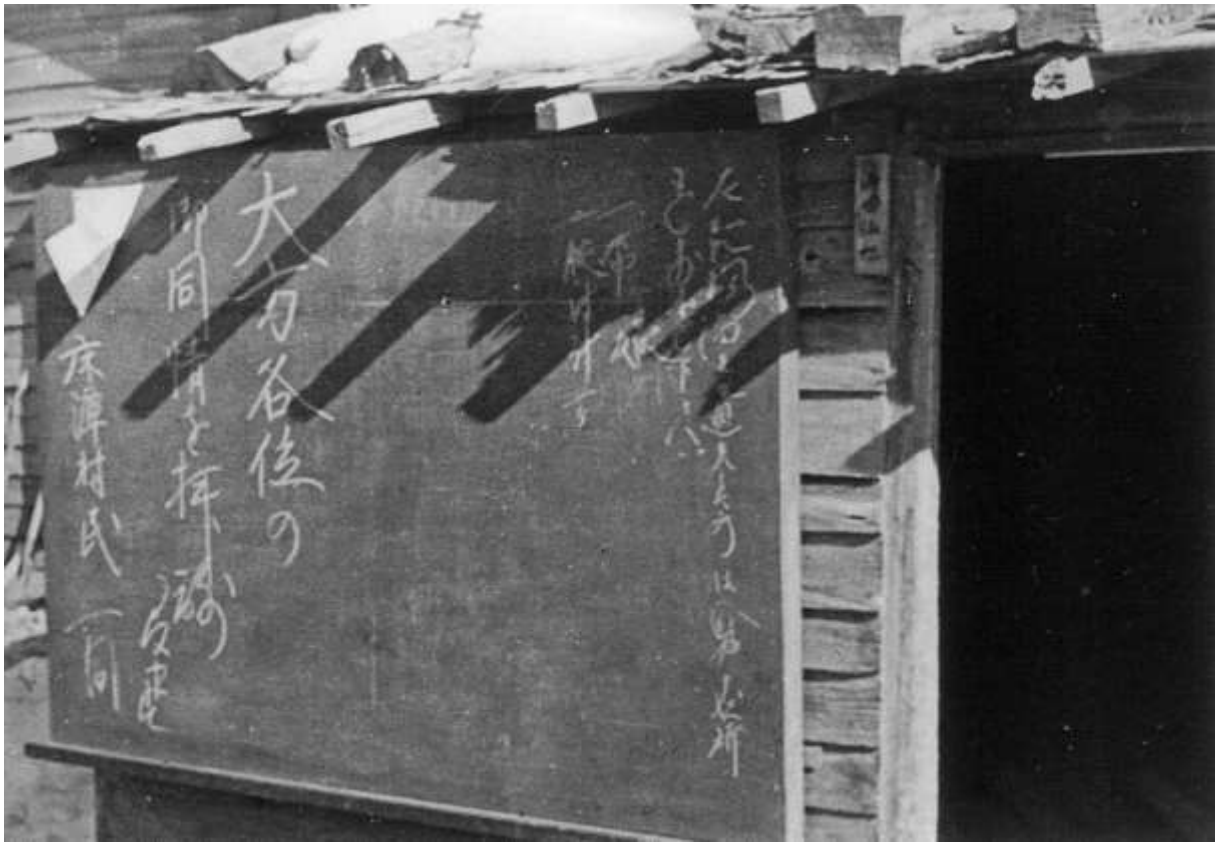
昭和２７年３月４日に地震と津波がありまして床潭が壊滅的な被害を受けました。

その翌日か翌々日に厚岸町議会の臨時議会が床潭で開かれ、全ての議員が消防車に乗って行ったと聞いています。そして床潭に入ってその惨状をつぶさに視察し、色々話もお聞きし、「復興に全力を挙げるから」と村の人たちと話し合いました。

その時に私の父が撮ったものがこの写真です。

本日の進行は、お手元のスクラップブックや、配布した資料と同じ写真を画面に映しますので、人物や場所、建物等の状況について教えていただき、この写真の資料として一つのものにまとめることで、昭和２７年の大津波の村の惨状を完全に記録できるのではないかと思いましたので是非ご協力をお願いいたします。

②　郵便局前の掲示板



震ふ大地と襲いかかって来た波。この恐怖の中より立上った村人達の唯一つの表現は村の入口にかけられた床潭郵便局備付の黒板に西村局長の手によって書かれた赤いチョークの走書の一句にみえた。

噫３月４日　白昼の通り魔か　全村タタキノメサレタ状態乍ら　虚脱感の村民の口元にも　不服の海に対する挑戦のきたへられた感覚は更によりよき愛する床潭村建設に努力する事をヒシヒシと感じたのである。

【車塚】　昭和２７年３月４日午前１０時２４分に発生した十勝沖地震は全体で死者行方不明者３３名、負傷者２８７名となっていますが、厚岸町の床潭地区は死者２名となっています。町報では、３名になっていますが、十勝沖地震の公式発表だと２名となっています。



亡くなられたのは小松さんと久保田さんの２名で間違いないですか。

【住民】　そうです。

【車塚】　当時地震が発生した段階で、床潭の郵便局長から役場に電話が入って惨状が報告されたというお話で、正午には既に災害対策本部が町に設置され、この後町内有志の方の寄付や色々な義援金の募集などが順次行われています。

十勝沖の地震調査委員会とで出した報告書はその２年後に出されて、床潭沼がある前の部分と、山裾が甚大な被害を受けた場所だという報告がされています。では、早速写真を見ていきたいと思います。

【室﨑】　これは西村退蔵さんの字と聞いていますが、非常に達筆な方です。

【車塚】　掲示していた場所はわかりますか。

【住民】　郵便局の前にあったんでないか。

【車塚】　大学や書道の先生にもご協力を頂きましたが、全ては読めませんでした。

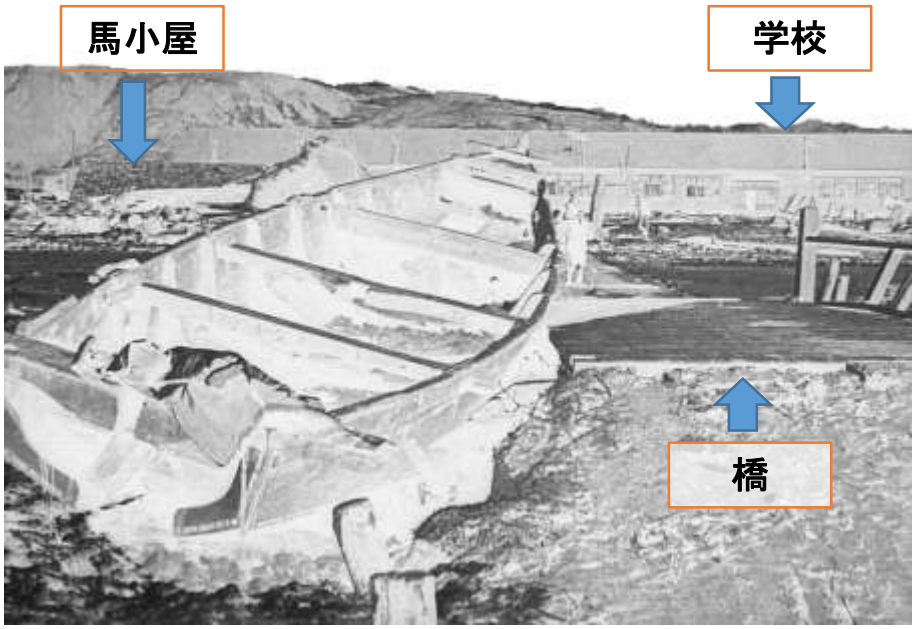
左側にはご同情を頂いた皆様への感謝の気持ちが記され「大方各位のご同情を拝謝　床潭村民一同」とあり、右側には遺失物の連絡が記され「左記に物品ヲ遺失した方は〇〇所までおこし下さい。一．〇〇、一．〇時計１ケ」と書いてあります。

【室﨑】　当時の掲示板ですね。

③ 保育所付近の橋から床潭小学校方向の状況



中学校前の橋へひっかかった大波の置土産
西村局長宅のすぐウラ
此の橋も全くこわれてゐます





【室﨑】　学校ですね。船の右側にあるのは保育所の橋ですか。

【高畠】　はい、うちの裏のあたり。

【室﨑】　そこは川ですね。　杭のような３本立っているのは橋の欄干でしょうか。

【高畠】　そうだね。

【室﨑】　保育所の方から見ているということでしょう。

【高島】　２番地にある方だ。

【室﨑】　今の学校はこれでいうと左側の手前に立っているんですね。

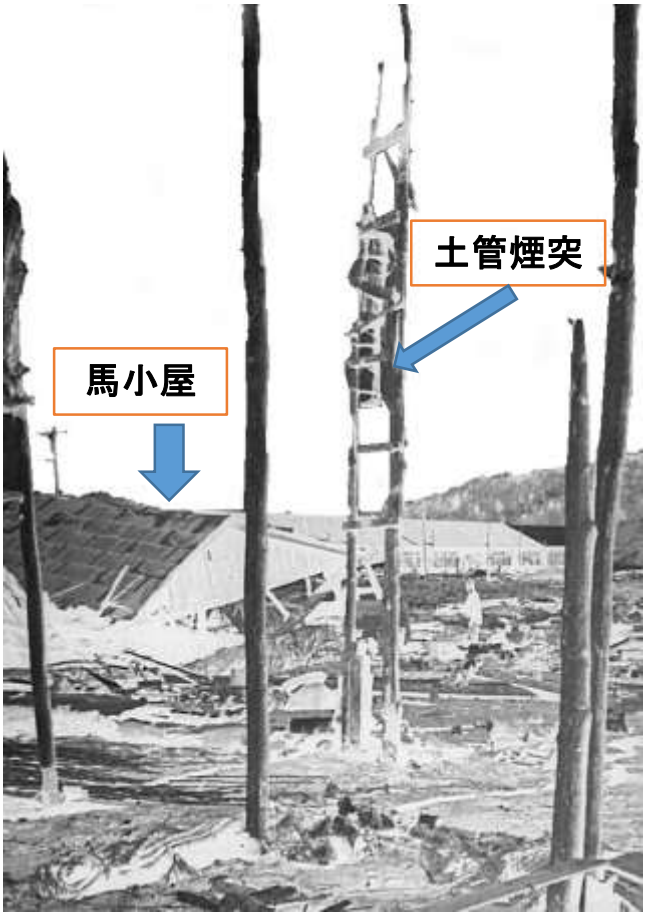
④ 高畠宅から床潭小学校方向の状況



“もう何も云い得ない”此の写真から受けるもの　あなたの胸は何とあなたに呼びかけるのでせうか　余りにも皮肉な天の徒らに土管二本がつられて　ストーブ、エントツのありかをみせています

私の家はここだったのだ　私のタイタ今朝のストーブの煙がこれから出たのだったかと此の柱をなぜてなきくずれてゐた女の人に一寸遠慮して頂いて写しました

でもその姿は私のカメラも写すのはイヤと泣いてしまったのです





（用語解説）

（注1）土管煙突
当時家屋の外に外壁に沿って煙突を立てたが、ブリキでは耐久力がないため、土管をいくつかつないで縦煙突とした。
支えは足場丸太を並行に建て梯子状の支えを入れた。
家は流され足場丸太と煙突の一部が残ったもの。

【車塚】　これは当時の学校の校舎が写っています。
古い校舎と建て増しした部分で、屋根の色が違います。
【室﨑】　潰れている屋根は校舎じゃないですね。
【車塚】　それは判断できませんでした。
【室﨑】　このひゅっと立っているの、何だかわかるでしょう。
煙突ですよ。土管煙突。（注１）
【高畠】　そして潰れているのが家だ。
【室﨑】　その屋根は高畠さんの家ですか。
【高畠】　家ではないけど馬小屋です。
【室﨑】　今の煙突があった家は誰の家かわかりますか。
【高畠】　高野（高野政男）さんの家でないだろうか。
【室﨑】　場所は今、高畠さんがお住まいになっている当たりですか。
それから学校の方を見ているんですね。
【高畠】　そうですね。

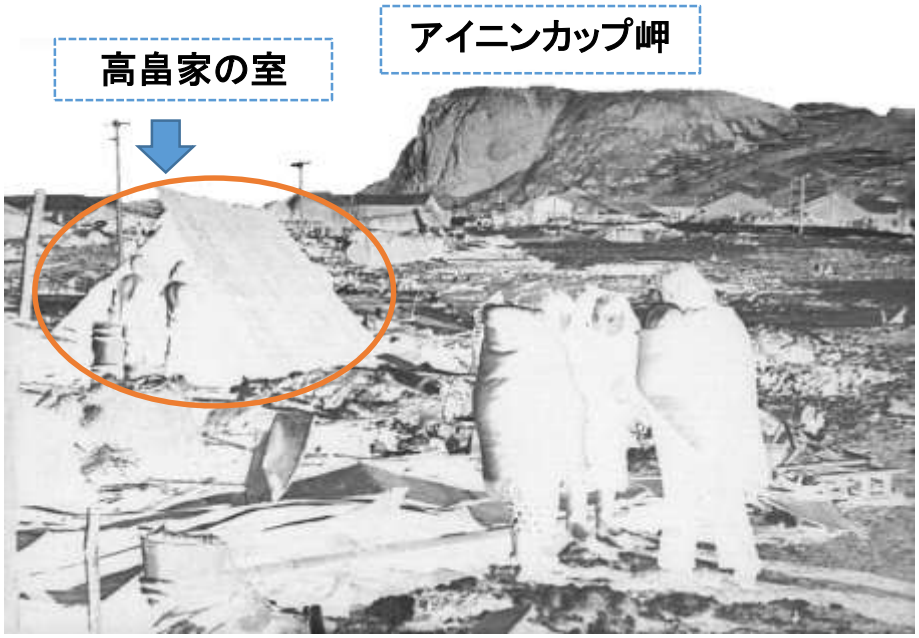
⑤　高畠宅の室の付近



一望徒らに悲愁の感を深くし　胸重く　歩む足も重い

死の恐怖　未ださめず　子供達はようやく町から借りた一枚の角巻と幼い弟妹を背負って何を語ってゐるのか

何も無い中から復興第一歩を踏み出さんとする村民の悲壮な姿



【遠藤】　この写真、うちの家内と磯田さんだ。
　　譲（磯田譲）の妹ともう一人誰だ。
【室﨑】　人が立っているのは現在のどのあたりですか。
【高畠】　三角の前に人が二人見えるところは、
　　うちの昔の室なんです。
【室﨑】　今の高畠さんのお宅ではないんですね。
　　うちはもっと下の方にあったんです。
　　今の佐藤さんの建っている家の所。
【車塚】　三角屋根の位置を図面で確認します。
【高畠】　三角屋根の先は、床潭の２番あたりです。
【車塚】　右側に学校があったんですね。



⑥　床潭入り口付近から大黒･小島方向の状況



左に小島　右に大黒島が望見される

稍中央にみえる電柱が大概かくれる程度の津波

セッケンあわをたてた様な波、一挙に押し上げて来た此の附近は只水神の怒りの侭に全てのものは海神の犠牲として運びさられたのである



【車塚】　大黒島と小島が映り込んでいます。ここに藁（ワラ）をたくさん積んだ家がありますが。

【高畠】　藁ではなく昆布なんですあれ。

【室﨑】　これはまだ遠景なのでよく解らないですね。その脇に潰れた屋根があります。

【遠藤】　８番あたりでないの。

【室﨑】　床潭の入り口のあたりから見ていますか。

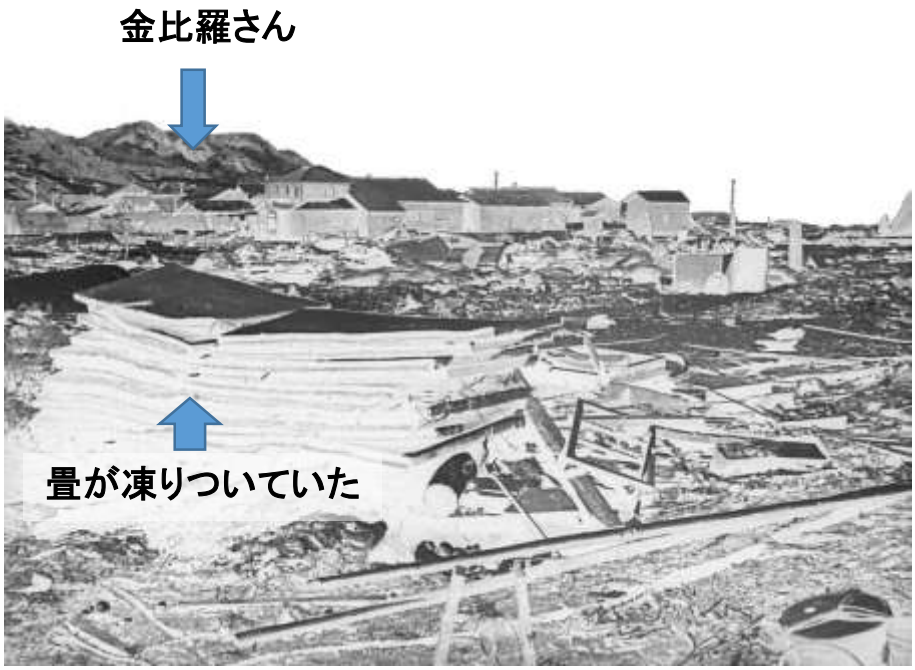
【住民】　位置的にそうだね。



⑦　床潭中心部からピリカウタ方向の状況



ようやく集めたいくらかのタタミは凍て付いて板同様
僅か流失を逃れた家屋の一群は　現地に於けるオアシスの感がある
左二階建は村集会所で避難所として使へたもの





【車塚】　ピリカウタに走っていく斜面があります。

【室﨑】　奥の遠景には金比羅さんが写ってるんですね。

【高畠】　そうですね。

これは鈴木勇さんのあたりだね。

【室﨑】　床潭に入って間もない中心部のあたりから見ている写真ですね。

【住民】　はい。

⑧　神社下付近の状況





床潭村５番地は村中でも中心的存在であった
そして又被害も中心となったのである
足の踏み場もない此の惨状に私も胸がドキドキ
してカメラも遂にブレテしまった
人影すらもない全くの死の一瞬とも云うところか　よろしく御想像に委せよう

拡大範囲



＊四角枠は前頁の拡大写真の部分

【車塚】　山並みの裾に道が走っています。

【高畠】　神社の下あたりだね。

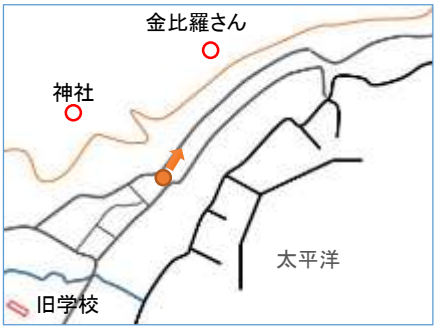
【室﨑】　この写真のもう少し左側に神社がある
ことになりますか。
しかし、本当にすごい惨状ですね。

【車塚】　ここの部分に注目して欲しいんですけど、
屋根の上に人が登っているように見える
んですが、その拡大写真がありました。
斜面に道があったんですか。

【高畠】　今でも通っている道があったね。

【室﨑】　父のメモや他の方からの資料を見ますと、
真龍や厚岸から直ぐ駆けつけて、片付け
などを手伝っていたようです。もしかする
とその方々が入って作業している状態かも
しれません。

【高畠】　そうだね。



⑨　水を含んで残った昆布の状況



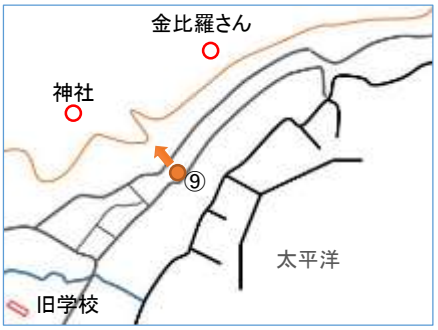
皮肉にも流失家屋のあとに昆布丈けは格納された姿の侭でつまれてゐた
然し一等検定を誇った昆布もこれでは全然ダメ
一ケ年の生命をかけた此の家の汗の結晶はこうして無残な姿に

（用語解説）

（注2） 16貫
16貫　8貫を2ケ束ねた。
中国大陸への輸出品であるため、相手国の重さの単位「斤」での切りのいい値　100斤（16貫）としたものと思われる。
1匁 ＝ 3．75g
1斤 ＝ 160匁 ＝ 600g
100斤 ＝　60kg ＝ 16貫

（注3） ユシュツ昆布
輸出コンブと思われる。戦前昆布は大量に中国大陸に向けて輸出された。
戦後もいわば銘柄として「輸出昆布」の名が使われていた。
結束方法は写真の通り現在とは異なる。写真では縄を用いて結束しているが、戦前は昆布で結束したという。





輸出コンブ（結束方法が今と異なる）
（倉庫の中にあったが、倉庫だけが流された）

【遠藤】　亀田さん、高橋さん、鈴木勇さんの家で一番端の家が多田さんの親せきの家。

【車塚】　場所的に亀田文雄さんの所ですね。

【遠藤】　俺は津波の時は街の方にいたから、戻ってきたら俺の家は流されて屋根だけあった。そしてうちのおふくろと子供がね、浜まで流されちゃった。どこにいるか分からなかったが、その後亀田さんの家でお世話になった。
これは、倉庫にあった昆布だから。

【室﨑】　この昆布が水を吸うから重たくなって残るんですね。
建物（倉庫）は流されて、この昆布は結束の仕方が今と全然違うでしょ。
当時、何貫という単位でしょうけど１段は何貫だったんですか。

【高島】　当時１６貫（６０㎏）でなかったか。（注２）
ユシュツ昆布って言って８貫のものを２つ束ねた。（注３）

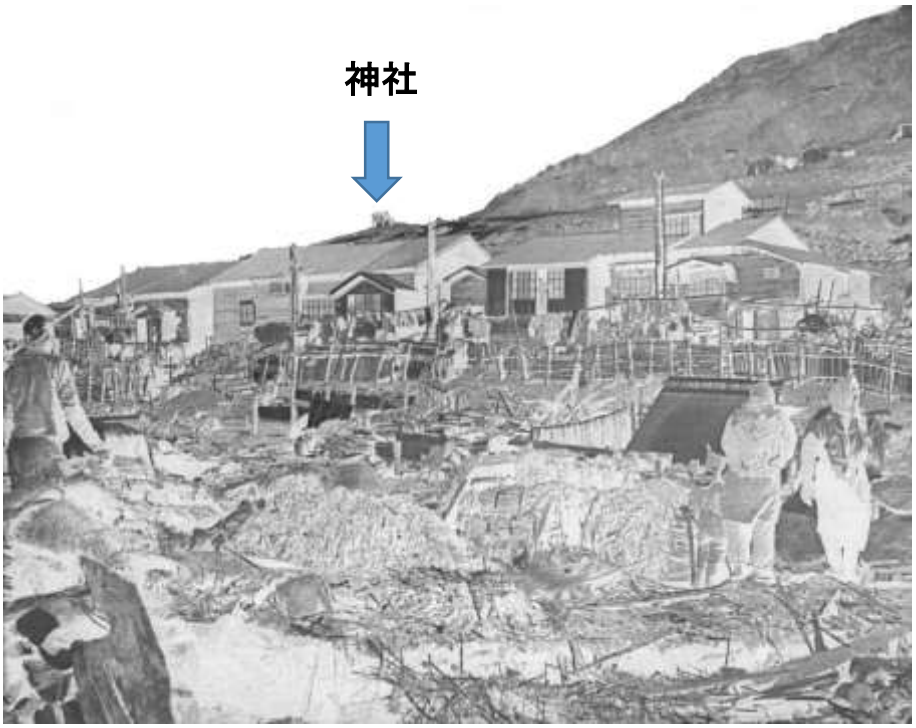
【室﨑】　今で考えれば良く持ち上げたなという重さですね。

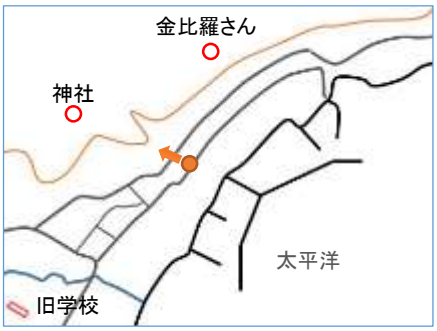
【遠藤】　この上に塚田さんの家があった。そして俺の隣が鈴木さんだった。
この昆布があったところには家があった。
俺の家の屋根なんかは浜の真ん中にあったもの。屋根だけ。
お袋がちょうど裁縫してた時の津波だから、生徒は窓から出るとかしてやっと足をかけて上がったらしい。
お袋は子どもがいるからそれをつかまえて一緒に流されちゃった。

⑩　昆布の脇で途方に暮れる住民



此の中に立った此の老人夫婦は愛する子供二人を戦争に捧げ　孫一人の成長を楽しみとしてゐた
今我家のあとに立って“どうすればよいのか”と泣いてゐる
きかれた私も“なんとかしよう”とは云ってみたが





【車塚】これは先ほどの写真と同じ構図（同じ場所）になります。

【遠藤】塚田敏春のお母さんだな。

【車塚】ここに小さなお子さんが映り込んでいるんですよね。馬もここに映り込んでて。

【室﨑】しかし、本当にどこから手を付けていいか分からない状態ですね。

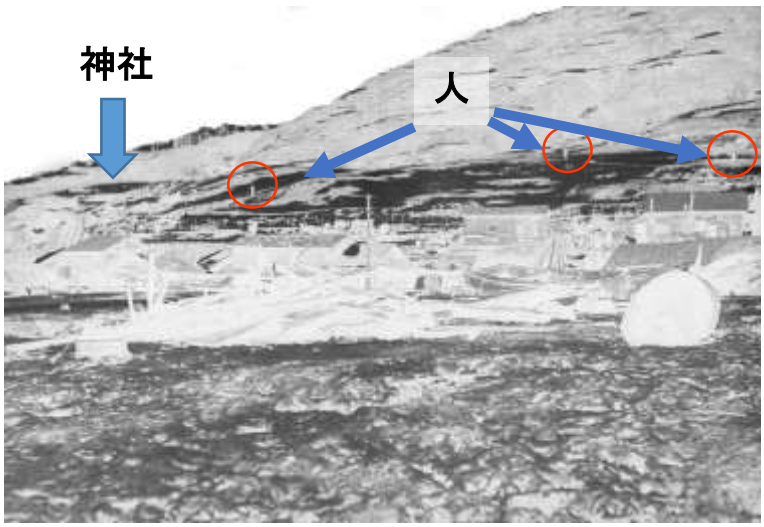
⑪



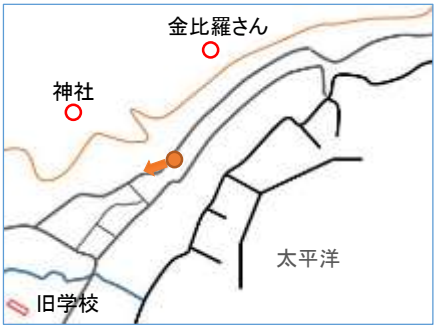
⑫



⑫



⑪



⑫



＜写真⑪＞

【車塚】　人が立っているところは昔の道ですか。

【住民】　どうかな。

【遠藤】　でも多田さんの家はあったよな。

【多田】　うちは潰れなかったもの。

【室﨑】　屋根だけ動いたということもありますので、ちょっとわからないですね。

＜写真⑫＞

【車塚】　もう少し山が映り込むようになっているのがこの写真です。
　　山側に人が歩いています。

【高畠】　道路があったんですよね。

【遠藤】　俺は山に避難していた。

【高島】　俺も山に３日間位居たから。

【室﨑】　手前のほうが波のようにも見えるんですが、これは雪ですね。

【車塚】　もう一点この画面では見にくいんですが、左側に鳥居が写っています。

【遠藤】　あるある、神社があるもの。

【室﨑】　それは今も同じ場所ですね。

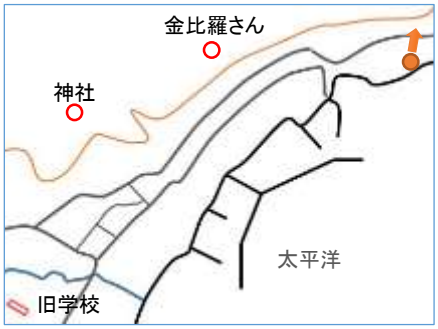
【遠藤】　そうだね。

⑬　救援活動の様子



チクシコイ青年団、末広青年団、本町消防団、隣村救護班等の救援活動はめざましいものがあった

家の中に入りこんだ発動漁船を引出してゐる救援隊



【遠藤】　これ、久保田さんの家で、当時すごい大きな家だったんだ。

【室﨑】　これは立派な家ですね。

【車塚】　これはどこらへんになるんですか。（上記地図で確認）

【遠藤】　久保田さんの家わかるかい。写真のちょっと左側のところ。

【室﨑】　筑紫恋から応援隊が来ていたんですね。

【住民】　お世話になった、本当だ。

⑭



（場所不明）

「こうした形は未だ良いほうだろう
何故なら　屋根の形があるからだ」とポツンと云った村人の横顔には生々しい
自然と闘ったキズが血をにじませて痛々しくみえた

【車塚】　学校の校舎ではないですよね。
【住民】　違うね。
【室﨑】　高畠一美さんが、その日何かの関係で真竜（湖北）に来ていたんですね。
【高畠】　おじいちゃんがね。
【室﨑】　渡船は潮が速くて全然出せなかった。だから早くても次の日に戻った。
この写真を見て、手前のワラの様に見えるんですけど、これはうちの
納屋・屋根でないかと言っていた。草があるように見えるんですよね。
【高畠】　家は学校のグラウンドに屋根が落ちていたんだけど。
【室﨑】　ちょっとハッキリしないですか。

⑮





【室﨑】　これ分かりますか。あのつっかえ棒は後からかけたもんですかね。

【高畠】　後からかけたもんだね。

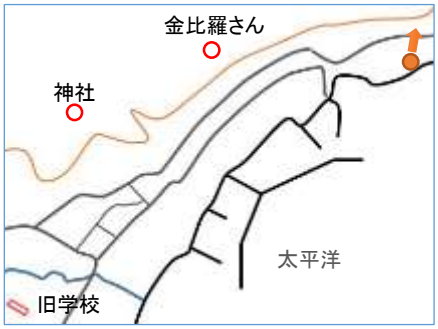
【室﨑】　崩れちゃうからね。これもこの写真だけじゃ位置はわからないですね。

⑬　救援活動の様子



チクシコイ青年団、末広青年団、本町消防団、隣村救護班等の救援活動はめざましいものがあった

家の中に入りこんだ発動漁船を引出してゐる救援隊



【遠藤】　これ、久保田さんの家で、当時すごい大きな家だったんだ。

【室﨑】　これは立派な家ですね。

【車塚】　これはどこらへんになるんですか。（上記地図で確認）

【遠藤】　久保田さんの家わかるかい。写真のちょっと左側のところ。

【室﨑】　筑紫恋から応援隊が来ていたんですね。

【住民】　お世話になった、本当だ。

⑭



（場所不明）

「こうした形は未だ良いほうだろう
何故なら　屋根の形があるからだ」とポツンと云った村人の横顔には生々しい
自然と闘ったキズが血をにじませて痛々しくみえた

【車塚】　学校の校舎ではないですよね。
【住民】　違うね。
【室﨑】　高畠一美さんが、その日何かの関係で真竜（湖北）に来ていたんですね。
【高畠】　おじいちゃんがね。
【室﨑】　渡船は潮が速くて全然出せなかった。だから早くても次の日に戻った。
この写真を見て、手前のワラの様に見えるんですけど、これはうちの
納屋・屋根でないかと言っていた。草があるように見えるんですよね。
【高畠】　家は学校のグラウンドに屋根が落ちていたんだけど。
【室﨑】　ちょっとハッキリしないですか。

⑮





【室﨑】　これ分かりますか。あのつっかえ棒は後からかけたもんですかね。

【高畠】　後からかけたもんだね。

【室﨑】　崩れちゃうからね。これもこの写真だけじゃ位置はわからないですね。

⑯　救援活動の様子



（場所不明）

かけ付けて来た人の手に依って早くも整理は開始されて行く

⑰　流失家屋跡の状況



流失家屋のあと
波の一部は凍って氷原となってゐる
その氷の中から昨日迄の我家の土台を見出し　思い出の子供のクツは、妻の衣はと捜しまわる人達の姿には　涙なくみる事は出来ない





【遠藤】　神社がここにあって、沢のところに床屋がある。

【室﨑】　あそこの家までは来なかった。前の方はみんなやられたということですね。

【遠藤】　だけども、高畠さんの方から２番地の方はそんなに傷んでないね。

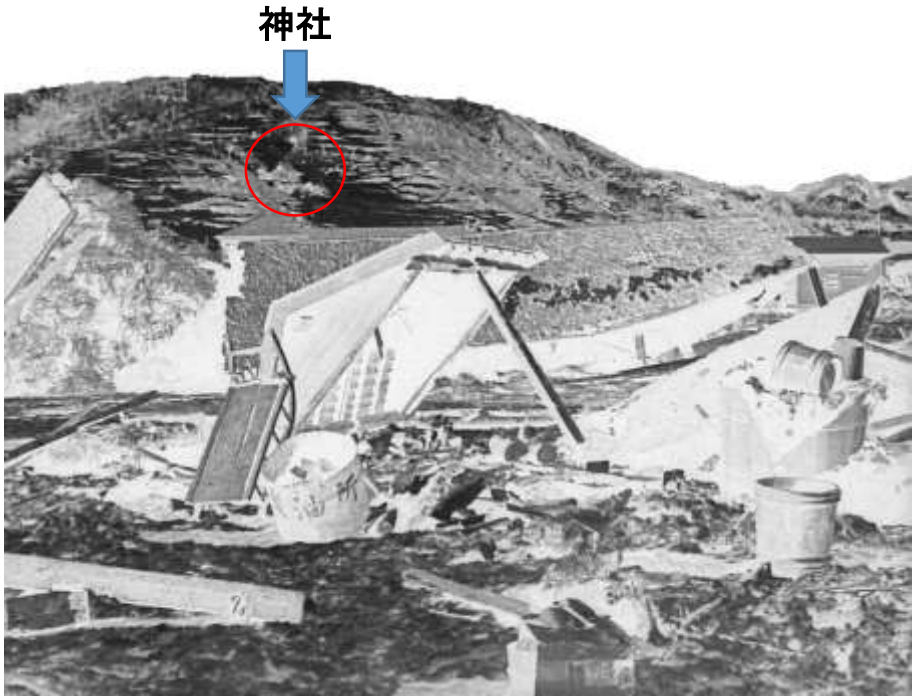
【車塚】　今、人立っているところ、家があったのか部材らしきものは、見受けられますけど。

【室﨑】　家かどうか分からないけど何らかの建物はあったんでしょうね。

⑱　倒壊家屋の惨状



こうした惨状の裡にも沈着な行動は　最小限の死傷者を以って難を避け得た事は
全く不幸中の幸いであった
倒壊家屋の惨状である





【車塚】　先ほどお話のあった草がたくさん積まれている建物です。
これはソリが写っています。

【遠藤】　高畠さんの家でないのかい。草あるし。

【住民】　そうだね。

【遠藤】　神社があるから位置が合うもの。

【室﨑】　そうすると潰れて脇に草があるのが何処になりますか。

【高畠】　これは前から流されたんだよね。

【遠藤】　大きい樽だとかって馬用のでないのかい。

【住民】　そうそう。

【室﨑】　このあたりに馬小屋があったんでないかと思われます。

【車塚】　今の通りを挟んで向かい側ですか。

【遠藤】　間違いない。神社の位置が合っている。

⑲　馬も住家を失う



倒壊家屋の間に　住家を失った馬は淋しく泣いてゐる



【遠藤】　あー間違いない。馬がいる。

【高畠】　帰ってきたんだ。

⑳　町議会議員による現地確認の様子



町議員団は中学校舎に現地町会を開き　岸田町長は熱涙を振って村民を激励、議会は全力を傾注して此の復興に盡さん事を決議　対策委員会を設置して　実行の速やかなるを期した

“百年の歴数が一瞬に廻った”と想わせる床潭村の悲しい想い出の一コマである

【車塚】　ここからは議員の一団が視察をしている場面になります。

【遠藤】　あの山の状態を見れば結構浜の方から撮っているよ。

【室﨑】　これを見ても奥の方にある家は無事なんですね。

【高畠】　はい。

【室﨑】　あれで床潭は平らのように見えるけど結構高いところと低いところがあるでしょう。

【高畠】　当時からみたら今はだいぶ平らになった。



㉑



よせて来た氷山の群　大波、地震と、三重、四重の為に堅固な倉庫も一たまりなく　全壊の状態となってゐる

余りの惨状に暫し呆然として術もなく言葉もなく久田議長は立ちつくしてゐた

村民は黙々として言葉一つなく　つぶれた家屋、流失し残った家財の少しでもと集めてゐる

【室﨑】　これが久田議長です。
体格のいい人でした。

【車塚】　これは⑳の写真と同じ場所に
なります。



㉒　浸水家屋の状況



いくらか小高い附近の半壊、浸水の家屋はタタミ干しに懸命だ
生き残った者の感がある
写真はつぶさに視察する町議員団

【室﨑】　畳を干しているんですね。
【車塚】　先ほど久田議長が立っていたところから、左にカメラを向けて撮っていたと思われます。



㉓　民家まで押し流された船の状況



波際にあった船が波に押されて此の倉庫に当り　加へて氷の山が押しよせた

写真は屋根と船と氷がかたまった侭流されて　とんでもないところに揚げられたもの



㉔



想わず駈け寄って村人の肩を抱き涙で慰問した久田議長の人間性

写真は駈け寄る久田議長（背をみせてゐる）



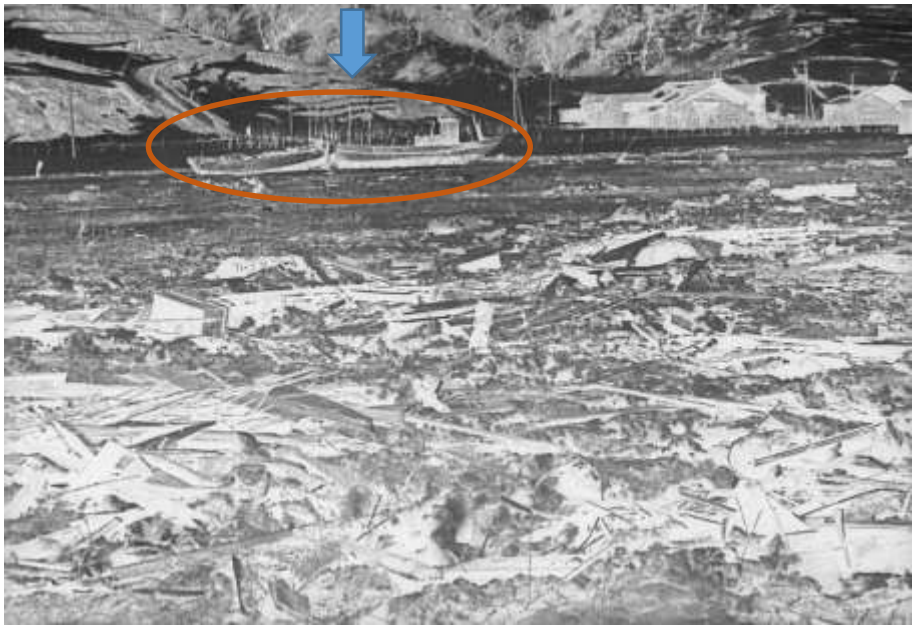
㉕　何も無くなってしまった惨状（学校付近からの様子）



ここには何もない　何にもない　家のあともみ当らない惨状だ

地形的に云ふと古川と云って昔の沼に通じた川に当ってゐたところ丈けに急速に引いて行った波はキレイに引去ってしまったのである

打ち上げられた船





【車塚】　これも遠景なんですが、先ほど見た⑱の建物が写っています。

【室﨑】　船がみんな打ち上げられている。

【遠藤】　船が上がっているんだから川を伝っているということなんだね。

【高畠】　そうだね。

【車塚】　船が上がったのは何処になりますか。

【室﨑】　背景から見てこれは学校の方ですか。
　　背景に段々があってそこの上に上がる道がある。

【遠藤】　写真の手前に学校がある。

【車塚】　学校のグラウンド当たりから撮ってる写真ですか。

【遠藤】　そうだ、学校のあたりからだ。
　　あの家は三鶴（高畠三鶴）さんの家だ（床屋さん）。

【室﨑】　そして道路は焼き場に上がっていく道路ですか。今は焼き場はないですけど。

㉖　床潭沼につながる川の跡



海浜より２００m以上離れた畑地の中へ此の家屋は押されて来たと村民の一人は指さしてゐた





【車塚】　これも恐らく⑭の所から左側にカメラを向けているという感じです。
奥に見えるのは床潭沼でしょうか。

【遠藤】　手前に潰れた屋根があるね。高畠さんのとこでないの、そこ川なんだけど。
家の屋根だ。あそこに電柱があって、山の位置からぼってけばそこら辺の位置になる。津波で掘れた訳でない。

【高島】　向こうの白いとこはなんだ。平らなところ。

【遠藤】　あっちが沼になるんでないの。
学校の生徒が氷を渡って逃げたというんだから。そして渡り切って間もなく（津波が）来たというんだから。

【室﨑】　その時、厚岸湖に氷が張ってたというから、床潭沼に氷が張っていない訳がない。高畠さんの家の方から床潭沼の方を見ているということになるんじゃないですか。それで手前に流れているのが川らしいと。

【遠藤】　川だ、間違いない。あそこの裏山の位置が合うもの。

【車塚】　ここには建物があったんですか。（床潭沼の奥）

【遠藤】　皆川さんだ。

【車塚】　そうしたら、今道道が走っているのはこの山裾を走っているんですね。

【室﨑】　湾月町に出る道は昔からあそこなんでしょ。結構な峠で越後茶屋（注４）があって。

【高畠】　そうそう。

（用語解説）

（注4）越後茶屋
床潭から奔渡へ抜ける道は、今でこそ自動車で一息だが、かつては急な峠を越えての遠い道だった。峠の頂上付近には「越後茶屋」という茶店があった

㉗



広野を行く感じがします　いくら行っても同じ感じです
無限の想い、無量の情を胸に此の人は只グルグルと宛もなく歩いてみました

【車塚】　これが先ほどの拡大の写真になります。
【住民】　橋がある。左側の方。
【室﨑】　船が何隻も入っていますね。
【遠藤】　船もみんな川を伝って上がったんだ。
【室﨑】　小さな川でも川がある所はものすごく影響がある。



㉘　300m以上流された発動機船



福得丸は発動機船だ
渚より此の点迄は３００m以上ある
もうすぐ国道だ
怒り狂つた波に彼女はその体を委せたのだ
無ざんにも彼女の体はキズダらけとなってゐる



【室﨑】　福得丸となっています。
【遠藤】　清作（久保田清作）さんの船だ。
俺らが厚岸から慌てて戻ってきたら
船が上がってたんだから。
【室﨑】　これ、場所はどの当たりですか。
【遠藤】　川伝いの頭の方。
【室﨑】　川を伝って沼の近くまで持って行か
れた訳ですね。もう一隻上がってますね。
清作さんと清三さんと御兄弟でしたよね。
【高畠】　そう。
【室﨑】　清作さんと清三（久保田清三）さんの奥さんにそれぞれ会っているけど、
写真を見せたときにどちらかが写真を見て泣いたんです。
【高畠】　清作さん大人をおぶって逃げて流されたんだもの。

【室﨑】　先ずは写真の話をさせて貰いましたけど、いろいろ見ていると当時を思い出されると思うんですが、その時のお話をしていただければと思います。
だいたい地震は１０時過ぎに来たんですね。

【高畠】　そうです。

【室﨑】　その時、何をしていましたか。

【高畠】　わたしは馬で父さんとおじいちゃんが町に行っていて、お昼に帰ってくるから、その支度をしていた時に地震が来たんです。今でいうと震度７か８位に感じて、立っていられなかったですよ。その時は津波が来るとは思わなかったけど、直ぐ子どもを負ぶって、火の始末をしたりしてたら浜の方から津波来るって誰かが叫んでたので、それで慌てて逃げました。

【遠藤】　俺の家内が言ってたけど、学校へ行くために家を出た時に誰かが津波来るって叫んで、それで皆泣いて沼を渡って山に逃げたら、間もなく来たらしい。子どもながらにブワーっと浜（波）が高くなったのを見ながら走ったっていう話だった。

【高畠】　本当に船が空についたような恰好になっていたのを見て私は逃げました。その後、後ろをみたらもう家が無くて、私も波につかりました。

【遠藤】　今になってみれば学校は流されなかったから、生徒は学校に居れば大丈夫だったけど、その時に学校が流されないという保証はないから。

【高畠】　久保田さんのおばあちゃんだったかな、津波来るって言ってたの。

【室﨑】　地震から津波までの間は時間が無かったんですか。

【高畠】　いや、ありました。

【遠藤】　かなり潮が引いたらしい。

【室﨑】　それは津波が来る前に引いたんですか。

【遠藤】　年がいってる人たちは津波が来ると分かった。

【室﨑】　それを見て早く逃げろと言った人たちがいたんですね。今と違って警報も何もないですから。津波が来る前に先ず潮が引くってよく言いますよね。

【遠藤】　番外地の方から来たらしい。

【室﨑】　あっちは岩礁で、それが潮が引いて岩の根まで見えたという話ですが。

【車塚】　ピリカウタの方が番外地ですか。

【高畠】　はい。

【車塚】　金比羅さんの周辺は８番ですか。

【遠藤】　通称ね、今は変わっちゃったよ。

【室﨑】　西側から行く訳ですね。８番地は途中で高く上がるでしょ。

【遠藤】　そう。我々はキラク街って言ってたんだ。

【住民】　関原（関原栄吉）さんあたり。

【室﨑】　そしてもう少し行くとピリカウタ、小島の前になりますよね。

【遠藤】　チリ津波の時は我々は全然大丈夫だった。

【室﨑】　２７年の十勝沖のときはあれだけやられたんだけど、チリ地震の時は床潭に被害があったと聞かないですね。しかし霧多布はものすごくやられた。

【住民】　その時の方向によって被害が違う。

【高島】　我々のところは大黒島の方から来ると被害があるし、小島の三角の方から来れば何ともなかった。

【室﨑】　床潭はこれだけやられたんだけど、末広（まびろ）、筑紫恋（ちくしこい）はたいしたことなかった。

【住民】　そうだね。

【室﨑】　地図だけをみると、どうして床潭だけがやられるのかと思ってしまう。海の底だとか岩礁だとか全然分からないですから。

【遠藤】　末広は大黒の前にあるし、床潭はその間にある。かえって、絞られて強く来たんだ。

【車塚】　当日のことで、先日高島さんのお宅に伺った時には、湾月のほうの学校に行ってたんでしたよね。他の方は床潭にいらしたんですか。

【高島】　いや町立病院にいた。その時に津波の話を聞いた。

【遠藤】　津波が来た時には町にいた。

【室﨑】　梅香町（病院）から歩いたら１時間はかかったでしょう。心配したでしょう。

【車塚】　床潭の小学校は実際に津波は襲って来なかったんですね。

【高畠】　校舎に波は入らなかったです。

【車塚】　当時の子ども達の作文で、津波が来たぞと声がかかって、窓から飛び降りて逃げたと書いてありました。

【遠藤】　うちの家内が言ってたが、浜のほうでどこかの母さんが津波来るって叫んでそれで逃げて、氷の張った沼を渡り切って間もなく津波が来たっていうんだ。

【車塚】　氷を渡って、高畠さんの方から見た斜面。火葬場のある方に逃げたんですね。

【住民】　山まで行くにはそこしかないから。

【車塚】　その後、そこで避難生活が始まると思うんですけど、何日間位山の上に居たんですか。

【高島】　３・４日いた。

【遠藤】　何日もいた。たまに片付けに下がるけど、夜になればおっかない（怖い）から、俺なんか火葬場の小屋に泊まった。

【室﨑】　余震がだいぶ続いたみたいですね。

【車塚】　避難中の食事はどうしたんですか。

【多田】　水は山から流れる水を利用して、鍋はあるから山から木を持ってきて、焚き火で飯を炊いていた。

【遠藤】　本当に落ち着くまでは結構かかった。

【室﨑】　多田さんの当時中学校２年生の文章によると、家の中で寝ることもできず、山の中で小屋を建てて野宿したと書いていますね。どういう小屋を建てたんですか。

【多田】　ただ棒を４本立ててムシロを張っただけの小屋だった。
ムシロを何枚も使って３日か４日過ごした。夜中になんかカサカサ鳴って、誰かと思ったら警察だった。夜回りしてたんだ。

【車塚】　避難して元の生活に戻るのは家ができて戻るんですか。何処か親戚の家とか。

【多田】　どこか家を借りたんでないのかな。家は直ぐに建たないもの。

【遠藤】　片付けもだいぶかかったし、片づけてからバラック建ててくれたのが何件かな。俺もバラックに入ったもの。川の辺りや浜にも建った。

【車塚】　それは誰が建ててくれたんですか。

【住民】　役場だ、町が。

【室﨑】　とにかく町が窓口になって、早急に入れる家を建てないといけなかったわけですね。

【車塚】　生活できるようになるまでは長い期間がかかったんですね。

【住民】　かかった。

【室﨑】　あのがれきを片付けるだけでも大変ですよね。今と違って重機もないですし。

【遠藤】　災害ということで、人の手を借り、町や村の人皆にお世話になった。一人で出来るもんじゃないから。

【車塚】　そういう時は馬は貴重な戦力だったんですか。

【高畠】　それは無かったです。馬は何にもできない。でも１０日ぐらい過ぎてから、用を足しに馬で出かけるようになりました。うちはきれいに無いんだから。

【室﨑】　バラックって何件位建ちました。

【高畠】　うちらのとこは、うちと、久保田さんと高野さんの３件だった。

【室﨑】　１０件位家が流されて、とにかく応急のバラック（仮設住宅）を建てたんですね。最終的にはそれを払い下げにして倉庫に使ったりしていたんでしょうけど。

【遠藤】　家が完全につぶれて無くなったという家は何軒もなかった。８番地の方だってそんなにないんだ。みんな形は残っていた。

【高畠】　完全に無くなったのはうちだけだったんじゃないだろうか。久保田さんも高野さんも、下はやられたけど上はあった。

【車塚】　避難するときに、例えば高島さんの自宅の裏は急こう配もありますけど、

あっちにも逃げた人はいるということなんですよね。

【高畠】　いたね。

【車塚】　てんでバラバラに逃げていく感じでしたか。

【遠藤】　我々はやっぱりここだ。こっち側の俺の本家の牧場。

【多田】　俺は遠藤さんの牧場の方へ上がっていた。

【室﨑】　今と違ってここが避難場所ですということは何もやっていないでしょ。

【住民】　何もないです。

【室﨑】　津波は知識としてみなさん知っているでしょうけど、現実の津波に会ったのは戦後これが初めてではなかったでしょうか。明治の初めころにはあったかもしれないですが。

【住民】　そうだね。

【室﨑】　やはりある程度年配の方が、地震のあと波がスーっと引いたら津波になるという知識は持っていて、だから逃げろと言ってくれたわけですね。

【車塚】　作文の中にもでてきますね。お父さんがそう言っていたという。

【車塚】　もうだいぶ前になりますが、他の地方で大きな地震があった時に海岸に避難した人たちがいました。津波がどういうものなのか全然伝わっていなかったということですね。そういう意味では、床潭の場合は“逃げろ”と言ってくれた人たちがいたことが、被害を最小限に食い止めたということなんですね。

【遠藤】　そういうことだね。

【室﨑】　これだけ大きな災害で亡くなった方が２人というのは、むしろ奇跡的なことだと思います。

【遠藤】　小松さんの家は流されなかったけど、おばあちゃんが子どもを負ぶっていたから亡くなった。

【室﨑】　浜に氷があり、その氷が波と一緒に流されて家を壊したということがあったのでしょうか。

【遠藤】　そうだと思う。護岸も何もないから、上がってはまた次の波で流されて山になっていた。

【室﨑】　波は何波も繰り返したんですね。

【遠藤】　そうそう。

【室﨑】　その氷に遮られる形で助かったわけですね。沖に流されないで。

【遠藤】　俺のおふくろはそうだった。そこでひっかっかった。子どもを抱いて

【米内山】先ほど郵便局の裏と保育所の裏に学校に行く橋が見えました。私は新しい床潭小学校を建てる時に担当をしていて、この川に津波が登ってくるのでこの側に建ててはだめなんだと言われていましたが、今お話を聞いているとやはり川を伝って津波が登ってきたということなんですね。

【国井】　２名の方が亡くなられたということで、その方は何をしていて逃げ遅れたのか分かりますか。

【遠藤】　やっぱり子供がいたりして出遅れたんだと思う。うちのお袋（裁縫の先生）は結果的に助かったけど、残った子供がいないかどうか確認したりして逃げ遅れた。生徒たちは窓から飛び降りて逃げ、親父は純子（遠藤弘さんの妹）を抱いてばっと出たから何もなかった。

【車塚】　負んぶしていた赤ちゃんだけ死んだんですか。

【遠藤】　小松さんはね。家が崩れて下敷きになったという話だった。

【車塚】　あともう一人、久保田さん（久保田清三さんの兄）はどうだったんですか。

【高畠】　足がちょっと不自由だった。弟さんが負ぶって逃げたんだけど、橋の所で流されて、転んだので負ぶった人だけずっと上の方に流された。だいぶ探したけど。負ぶっていた弟さんは助かった。

【車塚】　やはり川伝いに流された。

【高畠】　そうです。

【熊﨑】　学校は何ともなかったんですが、津波が押し寄せてくる方向はどこからだったんでしょうか。

【高畠】　真正面から川伝いに。波が天井に着くようだった。私は逃げてここら辺まで濡れたけどギリギリだった。橋から島田さんのとこまで上がったらもう波は来なかった。

【遠藤】　ひどいもんだな。あれだけのちょっとの高さでな。

【車塚】　津波がくるぞと声がかかって。大黒島と小島の間から来たとか、潮の流れは分かりませんか。

【高畠】　それは分からない。そんな余裕はないない。

【遠藤】　小島の人が川湯から帰ってきて、渡ろうとしたっていう。ところがすごい潮だったので渡れなかった。

【室﨑】　小島には波は上がらなかったんですよね。

【遠藤】　小島はチリの時も裏山に当たったけど、逆だったら大変だった。

【室﨑】　今回の話で、川や高畠さんの家、建物等の位置が概ね確認できましたし、波が来た方向も検討がつきました。今日は貴重なお話をしていただき本当にありがとうございました。

＜資料１＞　厚岸町史聞き取り調査記録（平成13年8月）

○　厚岸町史聴き取り調査

日時及び場所　　平成13年8月16日（木）

厚岸町役場発　　床潭東側視察　　床潭漁村センター　　床潭小学校付近視察

床潭西側視察（高島さん裏山付近）　床潭末広道路高台より床潭全容

床潭末広道路経由、厚岸町役場

内容

①　開会（事務局）

②　参加者紹介

厚岸町史編集員会紹介（敬称略）

室﨑正之　　池田敬冶　　佐藤宥紹　　佐々木巽　　中島弘美　　宮崎和子

床潭自治会参加者紹介（敬称略）

高島　昭　　高畠キエ　　須崎　薫　　中村武雄　　竹ケ原フミ　髙橋高徳

久保田清三　久保田キク　田海ミワ　　小島政男　　佐藤　喬　　吉川由松

③　内容（司会進行、【佐藤委員】）

「昭和27年3月の十勝沖地震・津波の被害について」

④　閉会（事務局）

【佐藤委員】　今日は二つのことを考えてきました。一つは、1952年３月４日の午前10時20分頃に起きた地震に関する記録づくりをしていますが、一時間くらいでお話しがはずめば、そちらを中心にしたいと思っています。
それから、昭和35年の5月にチリ沖地震の津波があったと思いますけど、その時のことを伺って参りたいというのが第一点であります。
第二点は、昭和27年3月4日の暮らしというのを取材したいと思っています。時間がなければ無理しないことにいたしますけどもその二つのことを進めさせて頂きたいと思います。こちらの方は４０分くらいと思っております。
一番最初に昭和２７年の３月にどこにいたかということをお聞きしたいと思います。
今日お話ししてくださるのは久保田さんからこちらの方とのことですが、こちらの方も自治会関係など覚えていらっしゃる方もいるかと思いますので、皆さんにお聞きしたいと思います。
ここに簡単な図面を作りました。須崎さんからどの辺においでになったかということと、何歳くらいだったか教えて下さい。

【須　　崎】　私は、今ちょうど70歳なので、49年前だと21歳ですか、地元にいたんです。沼の脇に学校がありますね、今の校舎から100メートルほど西にずれたところに校舎があった。
今の校舎の道路を挟みグラウンドを挟んだ西側にあったのが学校で、僕の家は、道路沿いのもう少し西側、学校の今の道路より100メートルくらい行った所に川がある。
今の沼のほかにもっと小さい沼があって今もなんぼかある。それから川が流れている。大きい川が流れているのではない。
【高　　島】　家は須崎さんから、約2、3百メートルくらい西寄りです。
【久 保 田 】　私は、当時は西側のはずれの方にいたんですよ。
山沿いの方に。今は中間に住んでます。
【中　　村】　私は、東側です。高畠さんの向かいです。
神社通りのちょっと上に家があった。
【高　　畠】　私は学校のすぐそばで、道路のすぐそばです。
【久 保 田】　高畠さんの筋向かいにあるんです。道路の脇で高畠さんの南側です。
【竹 ケ 原 】　私は当時、神社から100メートルくらい東側。
【高　　橋】　私は東側、小松さんが隣にいた。山の下の方。
【田　　海】　須崎さんの隣、西側の隣で。
【小　　島】　東側。崖の下のところ。
【佐　　藤】　小島さんの手前側西側のところ。
【佐藤委員】　吉川さんの家は。
【吉　　川】　宮下さんの下の方に。
【佐藤委員】　須田さん。
【須　　田】　小松商店の船揚場から100メートル沖にいました。ホッキ巻きをしてました。
【佐藤委員】　小松商店はどこにあるのですか。
【須　　田】　今やってないですけど、当時高橋さんの隣、手前。
【佐藤委員】　そうすると須田さんは、ここでホッキをやってた。家はどこだったんですか。
【須　　田】　筑紫恋です。
【佐藤委員】　一番地、二番地、三番地と番号がついていた。大きくいってどっちの方向からですか。
【不　　明】　西側からですね。
【佐藤委員】　何番地までですか。
【不　　明】　8番地まで。9番地っていう人もいたけど、８番地です。
【佐藤委員】　ここの家は何番地とかはわかりますか。久保田さんの家は何番地と言ってましたか。

【久 保 田 】　4番地。
【佐藤委員】　竹ケ原さんの家は。
【竹 ケ 原 】　6番地と言っていた。
【高　　橋】　うちは6番地。
【小　　島】　8番地。
【佐藤委員】　田海さんと須崎さんは。
【田　　海】　3番地。
【高　　畠】　４番地。
【久 保 田 】　１番地。
【須　　崎】　３番地。高島さんのところが２番地。
【佐藤委員】　だいたい見当はつきますね。それでは、ここまでのことで補充することありますか、このことを聞いといてくださいというのは。
あと、今無くなった郵便局は今の位置でいいですか。消防番屋みたいのは無かったですか、消防番屋は今の位置と変わっていますか。
【不　　明】　今の消防番屋の脇に駐在所があった。
【佐藤委員】　今の消防番屋の脇が駐在所。それからお寺があって神社があって、お店は2件。小松さんと宮下さん。
【不　　明】　何軒もあった。５軒くらい。
【佐藤委員】　何軒もあった。組合は無いですね。だいたいこんなもんですか。
ちなみに現在の消防ってどこにありますか。
【不　　明】　宮下商店のところ。
【佐藤委員】　じゃあ、ここに駐在所があった。何年くらいまでありました。
【不　　明】　津波の時はここにあった。保育所のところにあったがすでにこっちにきていた。
消防の小屋っていうのは無かった。当時は、火の見櫓というのか、その程度だった。
【佐藤委員】　このとき床潭の村ってだいたい何戸くらいありましたか。
【不　　明】　漁業を営んでいた人のほか、あの当時番屋に住んでいた人が相当いたから１５０～１６０戸くらいあったのではないか。
【高　　橋】　170戸。うちで豆腐屋やっていたから、１７０位あった。
【不　　明】　今と変わってない。
【不　　明】　漁業経営者は全体から見ると少ない。
【佐藤委員】　それでは話を絞りまして、3月４日午前１０時２０分です。
今にして思えばなんか変わったなあと思うことがありましたか。
地震の予知につながる様なことが。
【須　　崎】　須田さん沖に出て地震来たのは分かった。

【須　　田】　わかりました。ちょうど浅いところだった。二尋半（注１）くらいのところ。船のロープが延びて縮んだりして、それが地震だった。それから陸みたら、ちょうど遠藤さんの家が見えて、その縁々に積んであった薪がみんな崩れたそれで地震だとわかった。

【佐藤委員】　須田さんは、海でホッキをひいていた。（注２）
ロープは船を止めてるもの。

【須　　田】　漁具です。貝を引き寄せるための綱のこと。

【佐藤委員】　海老けた網、ホッキけた網漁具みたいなもの。

【須　　田】　そうです。

【佐藤委員】　けたを引っ張る綱が延びたり縮んだりしておかしいなと思った。それが海にいた時の地震だった。薪が積んであったのが崩れた。

【須　　田】　海岸を見たとき。

【須　　崎】　須田さんの見える向かいに遠藤さんといって、その当時、若い子供さんがいた。その女の子たちが、二階から飛び降りた。

【須　　田】　窓から５人も６人も出た。遠藤さんという家で、そこのお母さんが裁縫を教えていて、教室が二階で、女性たちが窓から５～６人出てくるのが見えた。だいたい岸から100メートル。離岸堤のあたり。

【佐藤委員】　山鳴りしたとか、雲がおかしかったとかそういうことはなくて、突然地震が来た。

【須　　田】　そうですね。

【佐藤委員】　それでは家にいた人。３月４日午前10時24分頃こういうのは覚えているっていうことは。

【不　　明】　私は、津波、波を見たんですよ。

【佐藤委員】　波を見た。まずは地震の時。

【不　　明】　私は家にいました。地震だなと思って玄関出たらちょっと止まったような感じだった。もう終わったと思って家に入ったらまた揺れてきた。母がいて、母があまり丈夫で無かったから、抱える様にして引っ張っていった。私は、お腹に子供がいて、その子が3月の7日に生まれたんですそんな調子で母をつれて外までは出たんです。玄関をまたいで出て、それから全然歩かれなくて、そこで二人で座ったきり地震が終わるまで外にいました。

【佐藤委員】　家は地震によって倒れたことはなかった。

【不　　明】　地震では壊れなかった。津波では壊れましたけど。

【佐藤委員】　皆さん、家の中でだいたい迎えられたのですか。

【不　　明】　漁師の人はちょうど２月３月は家にいますからね。

【佐藤委員】　暖房は薪ストーブですか。

【不　　明】　薪です。

【高　　畠】　我家はルンペンストーブ(注3) でした。昔だからお昼は芋を炊いて食べるんだよね。それから、芋の鍋が煮立っているから旦那が逃げるに逃げられなくて、その鍋を押さえて地震が終わるまでいた。外に出ないで。

【佐藤委員】　竹ケ原さんは。

【竹 ケ 原 】　流しの方は薪でしたけど、馬鈴薯煮てたのは石炭。

【佐藤委員】　それに湯沸かしがついていた。

【竹 ケ 原 】　そうです。

【佐藤委員】　石炭は三軒くらいであとはほとんど薪だった。

【須　　崎】　僕はその前の日に、焼酎を飲んでしまって、酔っぱらっていて親に地震だと言われてから起きた。今思うと薪ストーブだったです。そのころ若い人を何人か使ってタラ釣りっていう商売やっていた。その時も8人いて、孫ばあさんもいるから11人家族だった。当時昼は芋で、芋鍋はこんなでかい鍋で、両方に持つところがあり、台所からその芋鍋を砂地の作業場、小屋なんですがそこまで持って行った記憶があります。

【佐藤委員】　須崎さんは、家兼作業場のところで、二尺ぐらいの鍋で馬鈴薯煮ててその馬鈴薯だけを持って出たんだ。

【須　　崎】　もう揺れているから、危ないから、持たされたというより自分で持って出たと思う。

【佐藤委員】　ストーブを押さえたということは無いんですか。

【須　　崎】　水か何かかけたんでないか、みんなで。

【不　　明】　中村米吉さんという人が家に遊びに来ていた。地震だって出たんだけどもう階段だったから降りられなくて、煙突が立っている棒につかまってぐるぐる回っていた。そして地震が終わって津波になったら、家のじいさんがルンペン危ないからと言ってルンペンを外へ持って出た。その時にもう津波が来るからもう、ルンペンなんてそのままにして逃げなさいって言ったのは記憶あるけど。

【佐藤委員】　火事が出ないようにとルンペンを押さえた方はあまりいないようで、どうかわからないけど水かけたくらいのことはあったかもしれないということですね。薪ストーブは安定しているからおかまいなしということですかね。それでは、津波にしましょう。核心の部分ですけど。

【須　　崎】　記憶では地震の後に何分くらいでここに入って来たんですか津波は。

【佐々木委員】　町史では約30分となっている。

【高　　畠】　30分なんてない。地震終わって片付けてちょっとしたらまた地震が来たから出た。出て橋のところに来たら、ルンペンたないで（持って）投げて（投げ捨てる）ひょっと浜見たらもう波が。家のお父さんの妹がたないで投げてひょっと見たら、もう津波といっしょに船が上がってたから30分もない。

【不　　明】　30分というのは正確な時間でないと思いますよ。

【佐藤委員】　記録では、後で訂正があったかもしれないんですが、震度は4というふうに言ってます。

【一　　斉】　4ではない。全然きかない。

【不　　明】　7、8もあったのではないか。

【佐藤委員】　地震が終わったあと道庁の職員が来まして、その時の報告によれば、中心の震度は４と言っている。しかしそんなもんでない。

【不　　明】　立っていられなかった。

【佐藤委員】　立っていられなくて、棚の本が落ちたり、神棚の飾り道具が落ちた。

【久 保 田 】　私の記憶では激震だったと思う。両手でもって開けたり閉めたりする戸が勝手に行き来した。そのくらいの地震だったからかなりの地震だったと思う。

【佐藤委員】　茶ダンスとかは前に出たりしなかった。

【不　　明】　茶ダンスなんて持っていなかった。戸棚くらいはあったが。

【高　　畠】　私の家は馬車が商売だったので長い廊下に米とエン麦の俵なんか積んでありました。それがみんな地震の時に前に出てひっくり返っていた。それを片付けていた時、また地震がきたからルンペンたないで逃げたんです。家と向かいが、高野さんあたりが流された組ですから、結構強く来たと思います。あの辺は。

【佐藤委員】　そしてですね、記録によると地震後約３５分、１０時５５分前後に第一波が来襲したこういうふうになっています。海で見ていた須田さんいかがですか。

【須　　田】　３０分くらいです。

【佐藤委員】　みなさん大黒島の方から白波が押し寄せてきたと書いてますが。

【須　　崎】　そこらへんは、直接見ている人ですから詳しい。

【小　　島】　その当時家にいて薪を切っていた。地震が来てでっかい地震だから津波はおっかないぞと、親父が新潟県だから津波の経験あるわけだ。それで津波っていうのは地震来たからすぐくるんで無いんだぞ、何十分も経って、忘れた頃にやってくるから気をつけれよ、よく見てれよって言った。それを聞いたから私は、薪を切りながら「カジカケ」の方を見ていた。そしたら、どのくらい時間たってからだかわからないけれど、カジカケのところからウワッと盛り上がって、それから今度は、押されたように波が起きた。家のところで一人で立って見ていた津波は、自分の家のところに来た時はふちの方なのでたいしたことは無かったけど、浜の真ん中辺はものすごい高かった。ものすごい高い波が折れないでそのまま上がってきた。

【佐藤委員】　小島さん、カジカギとおっしゃいましたね。

【小　　島】　カジカケ、瀬がある。
【佐藤委員】　どこですか。
【須　　崎】　床潭の東、東側まっすぐ南、釧路の方に３００メートルくらいのところ船のカジがあたるからカジカケっていう。それくらい浅くなっている。
【佐藤委員】　船のカジがあたるからカジカケという。こういうふうに瀬がある。そこに波が当たってたの。
【小　　島】　それを中心とした場所に、そこら辺の水が全部集まってきたという感覚集まってきたのはグワーといっぺんに。
【須　　崎】　岸からみると、大黒が見えなくなるくらい高い波で、グワーとガバンガバンと折らないで、水面が高くなって押してきた。
【須　　田】　あの年は冬しばれて、海が凍ってザクでひどかった。それが今度波でもって。
【小　　島】　ザクは氷で、大きい氷でなく小さい氷。それが今度時化たとき海岸がすごく高くなる。波打ち際が。それでもってだいぶ助かった。
【佐藤委員】　それでもって、少し波が砕かれた。波が寄ってくるのを見てたのは、須田さんが漁をしながら、それから薪切りながら、あと高畠さんは。
【高　　畠】　ルンペン投げるときに外に出て、丁度家の所に川がありますから、そこにも波が上がってきて、その上に船が上がってきました。
【佐藤委員】　そうすると、薪を切っていた小島さんは、カジカケの方に吸い寄せられたと思ったら吹き出るように水が広がっていったというお話ですね。
須田さんはどんな風に見てましたか。
【須　　田】　私はその日は北風の中、ちょうど今のカジカケの方向、番外の先を見ながらホッキ漁をしてたんですけど、あそこの先はもう波で。あそこは下まで真っ白な雪だったんですけど雪煙をあげて１メートルから１メートル５０くらいの高さでもって波が来たのを覚えています。
【佐藤委員】　番外の先というところがあるんですね、そこに行ったんですか。
【須　　田】　先ですからほんとの岸まで雪があったんです。それが波でもって、雪が吹きあがって、１メートル～１メートル５０センチくらいの波でもって、ずーと岸を伝って行ったのを見ています。
【佐藤委員】　要するに津波が押し寄せてきて、陸に上がる時。高畠さんは。
【高　　畠】　ちょうど波が入って来る時、その波がおっきいのとその上に船が乗ってこう陸に上がるところを見て、逃げたんです。
【佐藤委員】　ここで、小島さんが見ていた。小島さんはカジカケ、須田さんは番外の先、高畠さんは、この入り口。竹ケ原さんは。
【竹 ケ 原 】　私は、外から津波だぞと言われて母を連れて、波が押し寄せているもんだから、子供を背中にしょいながら、裏に出るときにひょっと見た時に波が、今でいえば巻胴（注4）まで波が上がってきていた。

【佐藤委員】　巻胴ったら船を上げるやつ。
【竹 ケ 原 】　そう。
【佐藤委員】　だいたい、この地図で道路よりも浜寄り。
【竹 ケ 原 】　そう。
【佐藤委員】　浜は今よりは短い。海岸線は延びてる。
【須　　崎】　いまより５０メートルくらい。
【佐藤委員】　例えば、今より東側が長くなっているとか、西側が減っている、東側は無くなっているとか西側が後退しているとか。そういう言い方するとどっちがどうか。
【高　　橋】　うちの方は短くなっている。
【佐藤委員】　高橋さんの方は、短くなっている。
【須　　崎】　そういう言い方されれば短いな。相対的に短いのではないか。
【佐藤委員】　床潭の浜は相対的に短くなっている。でも部分的に長くなっているのは
【高　　畠】　うちのあたりは長くなっている。
【佐藤委員】　西の方が長くなっていて、東の方が少し短くなっている。
【高　　畠】　真ん中が一番長い、うちあたりの近所が一番長い。
【不　　明】　中心地が一番長い。
【高　　橋】　うちらのほうは短くなってるね。
【佐藤委員】　そうすると、よく俗に言ういっぺん津波の前に波が引いていって何とかっていうことはなかった。海岸線がずーと前の方に行ってそれからという事ではない。
【須　　田】　引いた記憶は全然ない。
【不　　明】　引かない、引かない。そのあと、何年か経ってからの津波は引いている。
【佐藤委員】　さっきは、海底についてた網が引っ張られると言ってたけど、津波の時はそういうことは。
【須　　田】　いや津波来たときは、もうすぐ上がりましたから、波でもってとめはずして、船立ててワイヤーが伸びて投げてしまったから。あの波の後ろ立ったから、その波が来てしまった。そしてさき（船首）が沖の方に向いてとも（船尾）が陸の方に向いたから、波が上がってすっかりどこの家が潰れたか見えるわけさ。
【佐藤委員】　そうすると地震とわかってその30分のうちに、さあそれと帰ったわけではなかった。
【須　　田】　商売（ホッキ引き）やってた。
すぐ津波だって分かってそしてすぐ止めたんです。
【佐藤委員】　そうすると、船はけっこうもてあそばれていた。
【須　　田】　いやー、番外の波を見て止めたわけさ。津波が来てると分かって。
すぐはどめはずして、まえを投げたらもう船はうねりになってきていた。

【須　　崎】　それは、その船は動力か、無動力か。
【須　　田】　無動力、０．５ｔの手押し。
【須　　崎】　エンジンかけて逃げたわけでなく、手押しで逃げたのかい。
【須　　田】　手押し。
【不　　明】　わしたちのすぐ目の前でやってたからね。
【佐藤委員】　そして、家に着いたのは、何分くらいでした。１１時過ぎていた。
【須　　田】　いやいや、過ぎてました。あのとき三杯いたんだから川尻さんのとこー杯と、２番地一杯と俺が小松さんとこに、三杯、一緒だったんだそしてとにかくゴメ岩向けて、魯おしたわけさ、そして三杯一緒になった。
第一波の時は、川尻さんの家は潰れていないと思ってるわけさ、今でいえば小松さんの家とか真田さんの網倉とか、佐藤さんあの辺の家、波が上がって家にぶつかって。そして、離れるとおっかないから、そしたら今度反対にだし波が出てきて、米びつとかね、葦かけた船（注５）がでてくるしょ。それでもって船ぶつかるのおっかなくて今度ね、表側にあげて逃げてきた。そしたらちょうどゴメ岩のニイカップに先かわることになったら、愛冠からすごいでかい波来たんだよ。それで2番地のとこから行って、川尻さんとこの家が潰れたのが、第１回目でないと思うんだ。２回目だと思うんだよな。
【不　　明】　二回目だね。たら釣り終わってた。
小松さんの豚小屋流れて、あれも第２回目で、そして豚が小屋から出て陸へ上がるのを。
【須　　田】　もうそのころは11時頃、ちょいなってたんでないか。
【不　　明】　ほっきは家の前でやってたからね。
【佐藤委員】　通常は、いつもならそこのところから、浜に帰ってくるのに何分ぐらいで帰ってくるんですか。
【須　　田】　手こぎだから、1時間半ぐらい、2時間近くかかる。
【佐藤委員】　そのときは、一生懸命やってたから沖の前には着いたけど、かれこれ小１時間はかかってる。
【須　　田】　そうです。
【佐藤委員】　当時の記録によると、沖合の高さは、当時の水面から5メートルくらい上がったんではないかと。海岸に来て波は折れ、波が折れるのは、さっきお話のあったザク氷の役割もあったのかもしれませんけど、約2メートルくらいの高さで、内陸にはいってきたのではないか、自分の身の丈と比べて。どうですか高畠さん。
【高　　畠】　なんだか、空まで船がついたような感じで。
【田　　海】　私が見たのは、へり前でちょうど学校の須崎さんのすぐそばなんですよ。そして、なんぼか坂になってるんで、うちらの方のこの辺なるね。

ここのとこで主人が薪を切って、あたしが丁度そのそばに。地震が終わった後なもんですから、2人していた。そしたらでっかい波が来て大黒島が見えないんです。いつもだと、そこにいれば大黒見えるんですよ。それが見えない高い波が。そしたら主人が津波だって、そうして、須崎さんの家と親戚なもんですから、須崎さんに入って、須崎さんの女の子横抱きにして私は一人おんぶって逃げたんですよ。そして私らも高島さんの裏山に逃げようと思ったら、私たちよりも先に船が、あの大きな沼に、船の方が何遍も私たちより先に行って、そのうちにここら辺に家が何軒かあったんですが、そこの家が２軒か3軒潰れてしまった。その時私は見えなかったけど、その後になって、帰ってきたら津波に流されて跡形もなかった。だからものすごい、私はいまでも津波が焼き付いていて忘れられない。

【佐藤委員】　田海さんのお宅こちらですね。

【田　　海】　はい、西側の方です。

【佐藤委員】　今おっしゃられた裏山というのはどの辺ですか。

【田　　海】　高島さんの裏側です。みんなそこに避難したんですよ。１番地、２番地、３番地の人は高島さんの裏に。

【不　　明】　ほとんどその山に避難した。

【須　　崎】　学校挟んで西側の人は、高島さんの山が小高いから、そっちへいった。

【佐藤委員】　ここのところが軸になって、こっち（西）にいった人と、こっち（東）にいった人がいた。火葬場でしたか。この辺。

【不　　明】　そうです。

【佐藤委員】　それでは記録によると、この沼めがけて第一波は入ってきたんですか。

【不　　明】　そうだと思います。川を伝わって皆川さんって店屋あるんですけど。

【須　　崎】　沼の一番はじですよ。そこに向かって学校の生徒が逃げていった氷張ってたから。その上がるか上がらないとこまで、もう津波が入ってた。

【佐藤委員】　そうするとだいたい津波の入ってきた方向としては、ここ湿地ですけど、こういう感じで入っていった。東の方向に入って行った。

【不　　明】　当時は、まだ沼に氷が張っていた。それで学校の生徒のほとんどが氷を渡って皆川さんとこへ逃げた。

【須　　崎】　その当時、中学２年生の人に聞いて来てる。学校の先生が指示することもできなくて、思い思いに逃げて、今の新校舎の裏手に郵便局に行く通りがあるんですが、そこに橋が一つあるんですよ。早い生徒は橋が壊れないうちに逃げたらしい。また、先生の指示がないから、沼が凍結しているから、沼に直接走っていった。その当時、みんな橋側に逃げなさいと先生の指示があったら、相当ケガ人が出ていたらしい。橋がやられているから。だけど、子供だから早いほうがいいということで沼に向かっ

た。沼は凍結していたから、ぬけた人がそこにいった。

【佐藤委員】　反面で言えば、凍結してたから水の入りも早かったんだろうけど。だいたい水はどのくらい奥までいったもんですか。

【不　　明】　皆川さんの道路の左側に家がある。その近くまでいった。いまは山根さんの家のところ。

【佐藤委員】　当時は山根さんの家はなかった。

【不　　明】　当時はなかった。

【不　　明】　私たちのとこは、渚の船あげていたところの川から波がきて川を伝って、船がここまできた。

【佐藤委員】　わかりました、この辺にいっぱい船が並んでたんですね。

【不　　明】　はい。

【佐藤委員】　こっちの方も並んでたけど、流された船っていうのは川境にして、どっちかに偏りますか。

【不　　明】　両方からいってる。

【佐藤委員】　やっぱり両方からいってる。船があったけど流されなかったのはどのくらいですかね。

【須　　崎】　僕らのところは、うねりはあがってきたけど、船はかろうじて引っ張られなかった。

【不　　明】　低い川の縁にある船が、絞るようにして川に入ってきた。

【須　　崎】　川の縁の船だけが入ってきた。

【不　　明】　川伝いに入ってきた。

【佐藤委員】　話しが核心になりますけどね、44戸が呑まれたというふうに言われていますね。この中にも被害にあった方がいらしゃると思うんですけど。
被害の集中していたのは、やっぱりこの川のあたりですか。

【不　　明】　川の付近です。

【佐々木委員】　結局、今の話があったのは、カジカケの瀬のところに随分かたまりがあったという話と、このあたりに住んでいる方が大黒島がいつも見えるのに、見えなくなったという話がありましたけど。そういう話を全体の上のほうから見た人はいないと思うんですけど、それを総合してある程度推測すると、例えばこういう線ですね。線があるとするとこの線のところで海面が、全部一律に5メートルなら5メートルの高さで整然とやってきた津波なのか、それとも東側の方がこのくらいで。真ん中の方が高くて不均等に盛り上がった津波がやってきたっていうのか見当はつきますか。

【高　　畠】　2回目って言いますけども、私は2回目なんて記憶にない。
地震が来て津波なんて私わからないけど、誰かが津波だーって言ったから。

【不　　明】　あっちは私たちのところより低かったから波にさらわれた。高い方に逃げたから助かった。

【佐藤委員】　整理しますけど、第一波は10時55分くらいなんですが、そのとき皆さんは平地にいるわけですよね。平地にいて、30分前から津波が来るぞっていうので逃げた人もいたかもしれないけど、来たときに逃げたんですね。記録によりますと、臨海実験所が11時10分っていいますから15分後くらいですね。そこに二波が来ましてこのとき3メートルくらい、それから第三波が12時くらいに来て、そのとき2メートルくらいって言ってます。臨海実験所のとこで。そこで、その時山の上にいたんでしょうけど二波三波の波が近づいてくるのを見た人はいない。

【一　　同】　いない、逃げているから。こっちの方にそんな余裕なんてないよ。山に避難してたけど、見てどうなるかっていう人は少ない。もうそこら壊されて流されていた。

【佐藤委員】　臨海実験所では、一波と二波は15分、三波は50分くらいということになっているんですが。

【高　　畠】　うちらあたりでは一回目でやられている。

【佐藤委員】　被害に遭われた方は、高畠さん、竹ケ原さん、壊れた、流されたという被害にあった範囲と、もう一つ水をかぶった、水がついた、床上浸水とかそれはどうですか。高畠さんと竹ケ原さんは壊れたか、流されたかしたのですか。

【高　　畠】　家は壊れないけども、家の中のものは、水に浸かった。

【竹 ケ 原 】　うちは、まるっきり流された。うちの近所は２～３軒流された。
中村さんも流された。

【佐藤委員】　あと津波に関しての話ありませんか、青年会館っていうのはありませんでしたか。

【一　　同】　はい、ありました。

【須　　崎】　今の新校舎の東に100メートルくらいのところに青年会館があった。

【佐藤委員】　それでみなさん、コートかなんか来たぐらいで、着の身着のままで逃げたんでしょう。こっちの山か、こっちの山にほとんど全村逃げましたね。そして津波は10時55分だから11時、まだお昼前に第一波が来ましたね。どのくらいの時間かわからないけども、流された人、壊された人、家についた人もいたんですね。いつ頃家へ戻ることになったんですか。

【高　　畠】　その日は私たちは、山で過ごした。夕方くらいまで。

【佐藤委員】　青年会館ともうひとつ学校が避難場所になりましたか。

【高　　畠】　はい。

【不　　明】　学校、水は通ったんだけど大したことなかった。

【佐藤委員】　位置的には結構危険な所だと思うんですけども、校舎そのものは、冠水

し水がついたくらいで。

【不　　明】　そんなにいかなかったんでないか。川の流れっていうか、水の流れっていうのか、30センチ高かったらそこをよけて低い方に流れていく。

【佐藤委員】　その結果、学校もそう。

【須　　崎】　１メートル２メートル高いとそこは大丈夫ってわけではない。ちょっとでも低ければ、強いて言えば10センチでも低ければそっちに水は流れてしまう。学校より沼の方が低かった。だから学校は助かった。

【佐藤委員】　それで学校と青年会館は、避難所となることができた。記録によれば４時頃、役場から毛布だとか布団だとかが届いたということになっていますね。夜も丘の上にいたわけではないんでしょ。

【高　　畠】　はい、私たちはそこが親戚ですから。

【佐藤委員】　学校の子供たちは何時頃家に帰ったんですか。

【須　　崎】　その日たまたま、学校で中学校を増設する会議か統廃合の会議が多分その日にあって、親父たちは学校にいたんです。昔は、高等小学校、それから中学が三年制になるということで校舎を一つ増やしてる。その会議か、それとも、その後すぐ厚岸との統廃合っていう問題で、その会議に当時の有力者っていう人が10人か15人集まって学校の職員室で会議開いている時間帯。だからうちの親父が帰って来たのは、三時過ぎ。その間裏山で避難してたのか。学校に帰って来てたのか。

【不　　明】　父さん家にいたんだ、それから晩になってから高島さんの倉に行って一晩泊まってきた。

【不　　明】　あの当時、わしたちはお寺に逃げて、住宅の方は被害なかった。
地震が何度か来た情報はなんも入らない、今と違って。強い余震が来るもんだから何も持たないで逃げた。

【須　　崎】　小島さんや佐藤さん、あんたたちの裏山の今工事やってるところ。ほとんどあの裏山に逃げた。

【小　　島】　ほとんど裏山だ。

【佐藤委員】　こっちは裏山ですか。名前はついているんですか。

【不　　明】　私たちは、遠藤さんの山って言ってた。

【佐藤委員】　二晩も寝た。

【不　　明】　結局、家の中帰られないから、むしろをしょって上がって。

【佐藤委員】　そうしますと、学校と青年会館は、少し高くてあまり水は着かなかったので避難所として使えた。そして４時頃来てということでしたが、家に自分の落ち着き先を見つけたのは何時ぐらいですか。

【不　　明】　わしらは高島さんの裏山、ほんとのちょっとの違いで高い方に逃げたけど、家のすぐ裏に山田さんっていう家があったんです。その奥さんは裏山に逃げないで、その波の来る川の方に逃げたんです。

そしたら、私たちが落ち着いて降りてきたでしょ。そしたら、その奥さんが女の子を一人おんぶして、手を血だらけにしてた。それでどうしたんですかと聞くと、裏山の方に逃げないで、津波だっていうんで低い川の方に逃げたんですと。そしたら流木、丸太と丸太に挟まっちゃったんですと。そして、手を見たら血だらけだった。

【佐々木委員】　第二波、第三波と繰り返しあったと思いますけど、被害の状況からみて、第一波と比べて大きさみたいなものわかったら聞きたいのですが。

【不　　明】　家の父が、それこそ昔のもんですから和船のコンブ船、実家でその船一艘しかなかったんですよね。そしてみんな高島さんの裏山へ逃げたでしょう。そしたら、大きな津波の引いたあとに家の父が、その船がいたましくて、ロープをもってきてどっかに縛りに浜に下がって行くんですよ。そして私らが行ったらまた津波が来るから行くなと言ったんです。一艘しかない。貧乏なもんですから。流されたら困ると。その時に、まだ家の船は、浜の中間のこの辺にあったんです。そしたら第一波か第二波だか三波だかわかんないけど、ちょうどこの辺まで来たんですよ。

【佐藤委員】　二波、三波による被害、二波、三波による思い出、恐怖。

【不　　明】　二波だか三波かわかんないけど来たんですよ。

【佐藤委員】　須田さんは筑紫恋に帰ったんだ。

【須　　田】　そうです。

【佐藤委員】　どうりで時間かかり過ぎるなと思いました。そうすると、基本的には第一波で大きく被害受けた。高さは、範囲は沼をかすめるかかすめない程度で山の方にぶつかったらしいんですが、高さは記憶ないですか。
学校の高さどの位あったんでしたか。

【不　　明】　学校は床上までいかないんでないか。

【佐藤委員】　学校は床が濡れなかったのですぐ使えた。要するに掃除したとかそんなことあったら結構かかりますもね。

【高　　畠】　学校は入ってなかった。

【竹 ケ 原 】　学校は逃れたよね。

【高　　畠】　うちの家財道具学校に預かった。

【佐藤委員】　これってどのくらい高さありました。ザク氷。

【須　　崎】　背丈だけあるかないか。

【不　　明】　いやいや、背丈できかない。
そばに行けばもう海見えないくらい。そしたら2メートル50センチくらいあったんでないか。

【佐藤委員】　津波にぶつかったけど、結構崩れるとかしないで。

【不　　明】　沼にもり上がってた。

【佐藤委員】　結構、防波堤の役割してた。

【不　　明】　してたと思う。
【佐藤委員】　それが無かったらもっと被害がひどかったかもしれない。
【不　　明】　そうだと思います。
【不　　明】　私たちのところは、今は家の前に道路あるけど、当時道路なかったから家の前、すぐそばまできた。
【佐藤委員】　この通りが先にあって、これは後からできた今の道路だね。
【不　　明】　今の道路だね。
【佐藤委員】　通りとしては、こっちの方が広いみたいだけどね。私も、ここの宮下さんというお宅はしょっちゅう来たんですけど。バスに乗って帰るので。じゃあ、二波、三波は、数回にわたって来たけども、二波、三波による被害は、すごいなっていう印象はあんまり無い。
【不　　明】　ないね。津波来たって裏山に逃げたからね。それから浜見るから、そしたら番外の先の方引いていったから。引いていった時にまた津波来るぞーって、言えば山に上がって行くから。順々、順々に山に上がって行くから。
【佐藤委員】　その第一波が来たときは海は引いていったという印象はないけれども、来た後はやっぱり、結構やっぱり砂地、浜出たもんですか。先までいきましたか。
【不　　明】　出ました。
【佐藤委員】　須田さんも床潭の浜に上がろうというつもりは無かった。
【須　　田】　なかったです。
【不　　明】　第一波の後は、かなり引きましたよ。私ここに長く住んでいるけどね。見たこと無い岩が見えました。
【佐藤委員】　大潮の比でない。大潮ってここはどの位引くんですか。
【不　　明】　２メートル５０センチ位も下げるかね。
【佐藤委員】　海面が２メートル５０センチ位下がって、浜が少し２０メートルか３０メートル出る。
【不　　明】　そう、潮引くときは何十メートルって引きますよ。大潮になればね。
【佐藤委員】　それを見ていたけど。それよりも。
【不　　明】　なんも、だってねカジカケって瀬、そこまで歩いていけるんだからね。
【佐藤委員】　さっきの話では300メートル位あるって聞いたけど、その位引いた。
【不　　明】　それをだいたい2回位やってますね。
【須　　崎】　地震来て遠藤さんの裁縫を教えてた家から、女の子が窓から飛び出たと言っていたけど、そこのかあさんっていう人は、当時男の子その子を抱いてね、津波の後、海の途中まで流された。
【不　　明】　流された。

【須　　崎】　その船を巻く巻胴っていって、それで船巻くんだけどね。そこまで子供と二人で流されて行って、その巻胴につかまった。本当は流されたんだけど、そこにつかまったから助かった。

【佐藤委員】　小島さん何か今お話あったようですけど。

【小　　島】　一波が来た後、ずーっと下げていきましたよ。それはそれは、カジカケって話出ましたけどね。そのカジカケまで歩いていけるくらい潮下げていきましたよ。2回あったもそれ。

【佐藤委員】　２回あった。

【小　　島】　１回で引いていってね、また上がってきて、また来た時は、そうだな、台風でいったらどの位のかな、かなりいい台風の時に波あがるでしょ。そのくらいのとこまで波が、水が上がってきた。ただ水が上がってくるだけだから。

【須　　崎】　台風のように沖がジャーと白くなって折ってくる。

【小　　島】　いや。

【須　　崎】　水が引いたまんま、来る。

【小　　島】　静かなもんだったよ。そしてね、ザーっと下げて、そして上げてきたんだけどね。このときは少しいいシケだなって、この位だったね。だいたい、海の波で言えば5メートルくらいの波。

【須　　崎】　津波来て、一波目で壊された、そして、二波目はやはりおっきい台風くらいの床潭に来るような波、三波目はまあ台風で今日は波出るぞっていうくらいの波。

【小　　島】　そうそう。それで後は、だいたい収まったようなもんですね。
こっちの方は8番地って言ってましたけどね。8番地の方でね、波があっこのカジカケから入ってくるには、北西に向かって入ってくるんですよ。そして俺の見た波はね、北西よりもまだ、むしろ沖の方から、南東よりも、まだ南の方に寄ったとこから来てるような感じだね。

【佐藤委員】　こういう感じで入っていた。

【小　　島】　そうだね。そして、家の建っている裏山をなめっていったようなかっこうなんです。シャーっとなめっていったような感じ。小松さん通り越してね、遠藤さんの本家あの人の家をなめってそして鈴木さんのところをなめって、中村さんあんたの前あたりに行ってるんでしょ。

【中　　村】　うん、来ました。

【小　　島】　それでそれを抜けていって、今度は川のところから、再度上がって来てるんです。

【須　　崎】　小島さんが言うには、波の差が何秒か何分かの違いだけど、まず8番地に一番先に波がつけて、こうなぞりながら磯谷さんのあそこら辺にいって、それからまた川の方に押してった。

【小　　島】　いったん8番地に上がった波がね、そこの佐田さんのあそこら辺から抜けて、その抜けた波が、再度波を形成して、その川から上がった。
【佐藤委員】　磯谷さんというお宅があったんですか。
【須　　崎】　小松さんあたりの。
【中嶋委員】　今、番外のそのあたりの。
【須　　崎】　だから8番地の方からやられてきた。何秒かの違いだろうけどね
【佐藤委員】　高さは、身の丈基準ですけど通りを越えてくるんですからね。
【須　　崎】　家の前でもって大黒島が見えないくらいの高さで来たって言うんだから5メートルも７メートルもあったんでないですか。
【佐藤委員】　一応記録では、5メートル位それに比べてわからないのは、二波、三波の波の高さがわからない。小島さん、第一波が5メートル位としたら、そのあとはどれくらいでしょうかね。そう言ったら、誘導尋問になってしまいますか。
【小　　島】　いや台風で言うとね、第二波の津波が来たあたりまで上がってくるとしたら、ものすごい大きな台風ですよ。波は、7～8メートルの波でないとこないから。この歳だから、気圧がなんぼだから波はどの位かそういう予想がつきますから。
【佐藤委員】　あの、3年くらい前の敬老の日前後に大きな嵐があったじゃないですか、あの時の波わかりますか。
【不　　明】　あれよりはでかい。
【小　　島】　雨降って風吹くと、それと秋になるとかわせ（注6）っていうのが吹く。いままで南から来てたのが、風が変わって北から来る。この風がすごいんですよ。これが北西にあればたいしたこと無いんですが、南西に変わってね、かわせの風だったら真っ向に入ってくるからものすごいでかい波ですよ。
【佐藤委員】　津波も、やっぱりその方角から波がきましたか。
【小　　島】　いや、津波は南東側から来ている。
【須　　崎】　8番地の方からなめってきた。
【佐藤委員】　南東って言うのは、波の方向に向かっていうんですね。背中でなくてね。
【須　　崎】　波が向かって来る方向。床潭で言うと小島、あれが南東です。
【佐藤委員】　さて本当は、もう一つテーマがあるんですが、そうしますと、２日から３日避難所もしくは、親戚の所にお世話になってだいたい戻って、被害にあった人はその建物の整理にあたったということになりますか。
町の方は、こちらの方で議会が写真を写してますが、当時おいでになった議員さんが、室﨑さんのお父さんがお撮りになった写真ですけども、議会はあそこでやったんですか。臨時議会を現場でやってますね。
【不　　明】　室﨑さんのお父さんでしたか。

【須　　崎】　ちょうどあの頃、協同組合の組合長選挙があった。津波の時は阿部庄太郎さんで、４月１日付けで選挙があり、床潭出身の佐藤安一さんは敗れて、野村さんが二期やった。その後佐藤さんがやった。その一同がすぐ津波の後きてね、ちょっと大型の船だったもんで浜までロープつけてね下げてもらった。

【佐藤委員】　久保田さんお話はありませんか。

【久 保 田 】　わしは、波は全然。ただびっくりしてどこにも出れないで、学校のそばの須崎さんの畑の上で、動けなかった。それから、須崎さんの家にいって世話になった。

【佐藤委員】　しばらく、引いていくのに時間かかったようですね。

【久 保 田 】　伊藤さんの家みんな潰れたから、そこが深くて須崎さんの家いくとき、ここまで漕いで行った。それからしばらくして高島さんの蔵さ行った。

【須　　崎】　明治時代に小さい川だったとこが、今になっても雨降ると川になる。

【佐藤委員】　せっかくの機会ですから、ここでいうことっていう、地震に関するお話ありませんか。

【室﨑委員】　一番最初の地震について戻るんだけども、先ほど佐藤先生の方から話があったけれど、仏壇だとか神棚とかそういうのは地震の時どんな状態になりました。

【高　　畠】　１回目の地震では、みんな落ちていました。

【室﨑委員】　この前釧路沖地震あったけど、結構揺れましたよね。あの時と比べてどうですか。

【不　　明】　あんなもんでない。

【不　　明】　７、８はあった。

【不　　明】　4ではきかない。

【不　　明】　こんな細い棒につかまってるくらいだから。

【不　　明】　震度なら7くらいあったんでないか。

【室﨑委員】　例えば押し入れのところに、からかみなんかあったでしょう。あれはどうですか。

【不　　明】　からかみは外れて倒れてましたね。

【室﨑委員】　この前の釧路沖地震の比ではなかったんですね。歩けなかった。

【不　　明】　歩けなかった。地震はこうでない（横）こうだった（縦）。足が下に着かない。

【佐藤委員】　つまり、平成5年1月の成人の日にあった地震と、6年の10月に震度6の地震があったんですけど、平成5年の成人の日よりもはるかに揺れが大きかった。震度4と5，6ではだいぶ違いますからね。

【不　　明】　今まで体験した中では最高の地震だね。

【不　　明】　地震で壊れたっていうのは聞かなかった。津波では流されたけど。

【室﨑委員】　ほとんどは平屋ですね。
【不　　明】　そう。
【不　　明】　27年の年だからまだまだ復興にはほど遠いから。雪降ればむしろぶら下げて隙間から雪が入ってこないようにそういう家だった。
【佐藤委員】　当時だったら、冬場なら結構襖なんか動かないくらい重くてね、止まってたと思うんだけどね。
【佐藤委員】　今日は時間がなくなったからできませんけど、その頃の家の間取りとか、昼馬鈴薯を食べようと思ってたとか、逃げて歩いた時の服装とか、そういうのをちょっとお伺いしようと思うんですが。
【一　　同】　そのまんま、着たまんま。
【須　　崎】　僕はまだ21か22歳だったんだけど、タビ履いていた。朝起きて、靴下でなく。年寄りおんぶって、高島さんのところに逃げてついたら倒れたから、津波っていうのはどんなものか全然見ていない。
【佐藤委員】　あとですね、昭和35年のチリ沖のときはこちらはいかがだったんですか。
【不　　明】　潮はかなり引いたな。
【不　　明】　被害は無かったね。
【佐藤委員】　被害は無かったけど、潮は引いた。
【不　　明】　あのときは朝だった。
【佐藤委員】　4時45分です。
【不　　明】　その時は、海の中の岩は見たこともない岩が見えた。
【佐藤委員】　300メートルもっといったか。さっきのカジカケよりも。
【不　　明】　十勝沖津波よりも、チリ沖の方が小さい島まで出たと思う。
【佐藤委員】　もっと引いた。
【不　　明】　はい。引きましたね。それこそ８番地から小島まで歩いて行けるくらい引いた。
【佐藤委員】　だけど潮位は上がらなかった。
【不　　明】　浜中方面の方はかなり被害があった。
【須　　崎】　何年だ。
【佐藤委員】　35年5月24日、1960年です。田海さんのように、朝起きておやっと異変に気がついた人と、まだ知らないでいる人とに分かれるんだ。委員さんのほうで何か聞いてくださる。ほかに私どもが調べているのは、まず、昭和27年3月の衣食住、これを調べたい。その頃あって無くなった地名、集落、床潭には該当しないかもしれないけど。今言った何とかの裏山とか、遠藤さんの山とか、そういう地名などを調べております。
カード渡したら書き込んでくださいますかね。その時の家はこんな間取りだったとか。茶の間があってストーブがあって、奥の方に畳の部屋２つあってとか。

【須　　崎】　そのくらいだったら。

【佐藤委員】　そうですか、後でお願いするかと思いますから。委員さん何かありませんか。無ければ帰りませんか。

【宮崎委員】　その当時、被害にあったとき役場ではどのような援助をしてくれたか。記憶ありましたら。

【高　　畠】　私は商売が馬車屋でしたので、ちょうど１歳の子供がおりました。豆腐屋さんが、厚岸の豆腐運んでおりましたから、そこの家でおむつを頂きましたのでほんとに助かりました。晩方、役場の方から学校で物資配給しますからと子供さんは子供さんがいるようなものもらったり毛布もらったり本当に助かりました。

【不　　明】　私ももらいにきました。学校にね。

【高　　畠】　今はもう津波だったらああやって来るから。昔でしたから助かりました

【池田委員】　炊き出しや何かはなかったんですか。

【不　　明】　なかったですね。

【佐藤委員】　毛布だとか寝具だとか、やっぱり当時は保険もなかったしね、家倒れてもね。

【不　　明】　何日か経ってから公住建ててもらいましたけどね。

【佐藤委員】　位置は多分図面があると思いますから。

【室﨑委員】　あと、佐藤先生の方からおっしゃった様に、まだまだ今日のはいわば総論みたいなもので聞きたいことは沢山あるんですよ。

例えば昭和27年頃どんな暮らしをしていましたか、なんて言ったって覚えてないんですよ。だけどもあの日っていうとみんな覚えているんですよ。あの日を一つの基準にして、町史なんか作る中では。どうしても町史っていうのは行政文書っていうのか、何月何日町長がどこ行ったっていうのは残っているから、そういうことが中心になりがちなんだけど、そうじゃなくて、やっぱりその時みんながどういう暮らしをしていたかっていうのをきちんと残したいんです。例えば、今、ごしょ芋食べてたなんて話も今の若い人たちはわからないですよね。やっぱり、きちんと教えて残していかなければならない。そういう意味でも非常に大事な記録だと思うんです。だから例えば角巻、防寒服なのかもう既にオーバーになってたのか、そういうことがあの日ならわかると思うんです。それから、コンブの結束一つとっても今と違いますものね。そういうものをこれからいろんな機会に町史あるいは、町のほうから来て皆さんに教えて頂きたいと思いますので、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

＊当資料は町史編纂資料に若干の文言精査をしています。

＜語句注釈＞

（注１）二尋半：15尺（4.545メートル）

「尋」：水深などをはかる長さの単位

１尋＝６尺（1.818メートル）

（注２）ホッキひき

マンガン（爪が5・6本ついたバケット）を巻き上げてすくう漁法で、当時は人力で巻き上げていた。

（注３）ルンペンストーブ

昭和初期に北海道を中心に使われたストーブ。燃料は主に石炭や薪などで、これを円筒状のストーブ内に詰め込み上から着火する。火力の調整は本体下部にある空気取り入れ口の開き具合で調整していた。

（注４）巻胴（まきど）：

漁船を海から引き上げる道具。
中央の穴に丸太を通し、数人の
人力で回りながら巻き上げる。



巻胴

（注５）葦かけた船：葦を使って冬囲いをした船。

（注６）かわせ：風向きが変わるときに使う言葉。

「あい」：北寄りの風、「やませ」：東寄りの風、「ひかた」：南西の風

＜資料２＞　海岸線の俗称及び地名



＜資料３＞　床潭地区地形図及び当時の番地

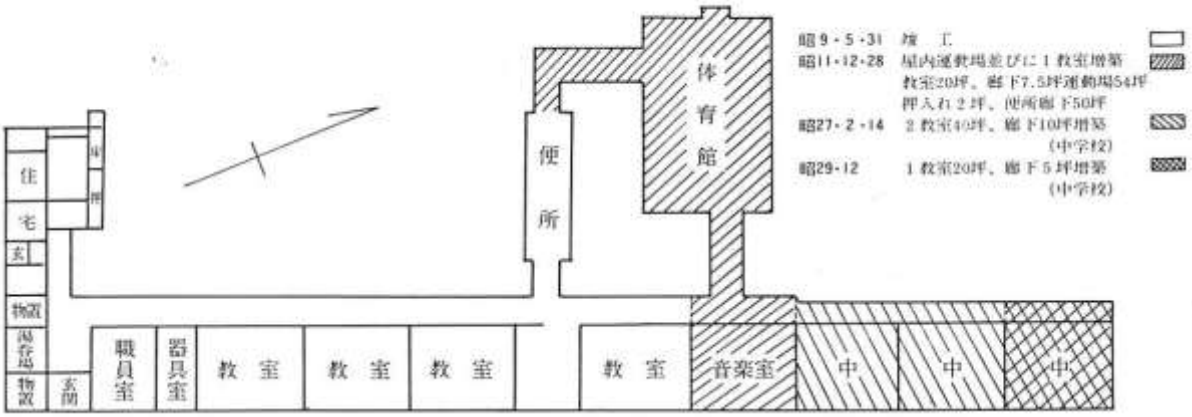


＜資料４＞　床潭小学校開校80周年「八十路の歩み」より



床潭小学校下校見取図（昭56）

床潭小・中学校平面図　（昭和9･5･31～昭36･9･25日）



＜資料５＞　昭和27年当時の生活について

（高畠キエ氏（大正１５年（昭和元）生まれ）の個別聞き取り調査による（2018年）

▮当日の家族構成と状況

高畠家は、当時、馬を使って運送業をしていた。馬を何頭も飼っていたが、津波で馬が流され、昭和27、28年くらいに、トラックに切り替えた。

　津波当日は、お父さん（ご主人）とおじいちゃんと若い従業員とが、馬に荷物を積んで、町に出ていた。おばあちゃんは、その朝、町へ用足しに出て家にはいなかった。家には、私と娘、それとお父さんの妹の３人だけだった。

最初の地震が来たとき、自宅の家具類や廊下に積んでいた町に運ぶための米俵などがみんなひっくり返った。私は子供を負ぶって、片づけていた。そしたら、二回目の地震が来た。すると、家の前のばあちゃんが「津波、来るぞー」か、「来たぞー」か、何かを叫んだのが聞こえて、それで慌てて逃げた。

着の身着のままで逃げた。モンペのようなズボンをはいていた。ちょうど、子供を負ぶって家の中を片づけていたからよかった。おばあちゃんも町の方に出ていたから、もし、おばあちゃんが家にいたら流されていたかもしれない。私と妹と二人だったからよかったのかもしれない。

こっちの方（旧床潭小学校横）に、小さい橋が架かっているが、その橋を越えて、後ろを見たら、もう家がなかった。波がサァーっときた。私たちは、膝のあたりまで濡れた。大した大きい波でもなかったけど、そのあと、大きいのが来たんだと思う。

よく助かった。私の後ろで、近所の家族が流されて亡くなった。その人は歩けなかったから、負ぶってもらって逃げてきた。私が橋を渡ったら、「ワァー」って声がした。ひょいっと後ろを見たら、その人が流されていなくなっていた。

▮当日の食事

昼に家族の人が、仕事から戻って来るので、食べさせようと思って、朝、ジャガイモの皮を剥いて、火にかけてゆでていた。当時、ルンペンストーブだったので、その上にかけていた。そしたら、まだ炊けないうちに地震が来た。一緒に住んでいた妹が、火事でも出したら困ると思って、ルンペンストーブをかかえて逃げ、近くの川にガァーと投げたことを覚えている。

普段の食事は、やっぱり、働いている人はご飯だった。津波の時は、ジャガイモでも茹でて食べようと思っていた。茹でたジャガイモは何にもつけずに食べたり、バター付けたりして食べた。当時、バターは手に入った。

普段の朝は、ご飯を炊いて、みそ汁作って、魚焼いて食べたりしていた。

ニシンがとれていた。三月だと春ニシンがとれた。トラックのない時代は、馬に積んで、奔渡（厚岸町内）の市場に持って行った。重労働だった。保存方法としては、ニシンやサケなどは、塩蔵だった。床潭周辺は、助宗（スケソウダラ）などをとっていた。魚には不自由しなかった。

生活水は、井戸があった。うちの前に井戸があったが風呂の水や馬の水として使っていた。飲料水としては、郵便局の近く、西村さんの家の角に井戸があり、そこまで汲みに行った。水を汲みに行くのは、子供の仕事だった。

▮生業

昭和24年に嫁いできた時には、現在の家周辺は畑地が広がっていた。作物は、じゃがいもや大根、カボチャなど。自分たちで食べる分は、育てていた。

▌当日の衣服

和装ではなく、洋服だった。子供を負ぶっているときなどは、その上から角巻をまいたりしていた。私は、ズボンをはいてセーターを着ていた。当時はズボンもモンペも両方はいていた。小学校時代は、やっぱりズボンをはいて、セーターを着ていた。

昭和２７年頃は、靴や長靴は普通に履いていた。（津波の時）逃げるときは、ただ、子供を負ぶって、そのままで逃げた。はだしではなく、靴をはいて、セーターを着て。

▌当時の住宅

家は、二階建ての作りだった。二階に部屋が四つくらいあった。八畳の部屋一つに、あと六畳の部屋などがあった。若い従業員を一人雇っていて、その他、お父さん（ご主人）の弟と妹が同居していた。一階には、私たち夫婦の部屋と、おじいちゃんとおばあちゃんたちの部屋や、台所と居間があった。全部で五つぐらい部屋がある、大きな家だった。

▌その他

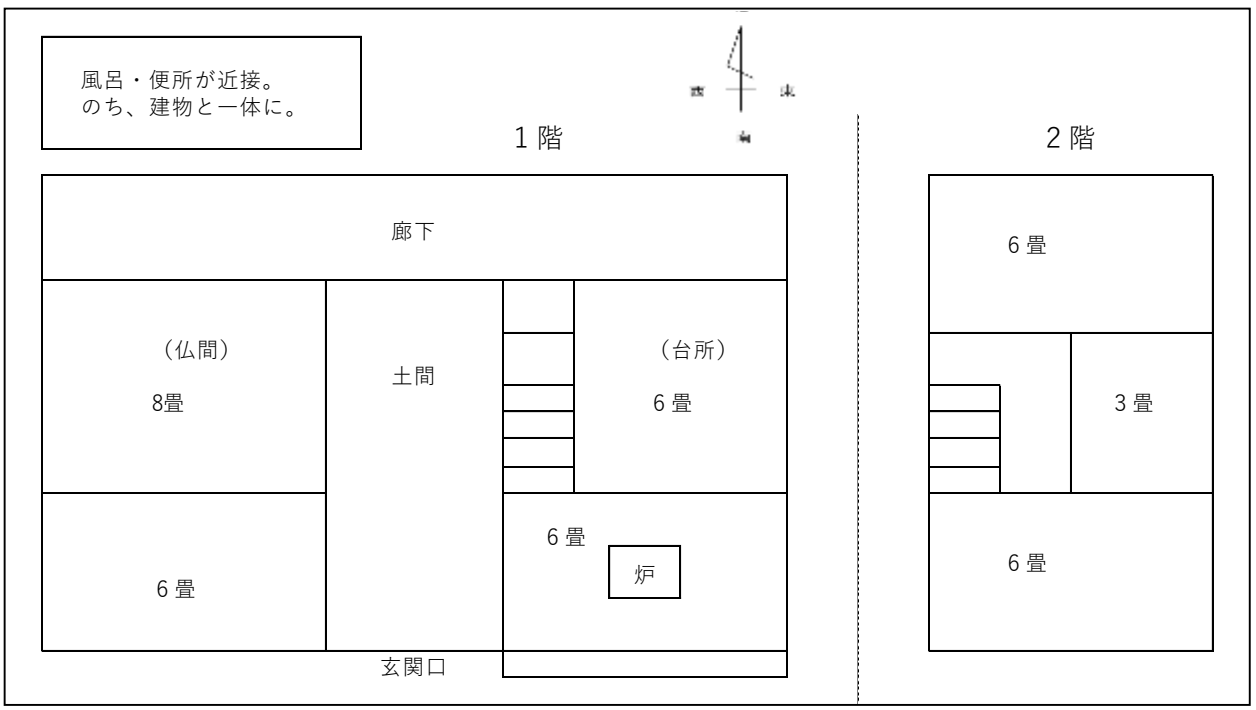
私が嫁いできたときは、西村さんの隣に床屋があった。床屋は、当時この一軒だけだった。

床潭にあった商店は、住吉さん、稲葉さん、高畠さん、宮下さんがあって、その他にも小松さんがあったと記憶している。町に出なくても、結構買い物には不自由しなかった。

また、家のおじいちゃん（ご主人の父親）が、お酒を飲む人だったので、床潭から町に向かう途中に茶店みたいなものがあった。床潭沼から上がった山の端っこ辺り。酒でもなんでも売ってた。昔、うちのじいちゃんは、厚岸から荷物を積んでくると、馬を茶店の前において飲んでいると、馬がとことこ、自宅まで歩いて帰ってくる。この茶店は越後茶屋（えちごぢゃや）と言って、昭和３０年代くらいまでやっていたようだ。

お店の大きさはちょっとした家くらいあった。労働者が相手だから、靴はそのまま入るようにして、土間みたいだった記憶がある。町から歩いて帰ってくると、その店に寄って何か買って帰ったもんだ。

■当時の高畠宅の間取り



昭和27年3月15日　発行

町報あっけし

税金は　復興へ　建設へ

発行所　厚岸町弘報委員会
厚岸町役場内　厚岸町大字梅香町
厚岸郡厚岸町
編集発行人　佐藤　五后
印刷所　阿寒郡雄別炭山旭町一丁目
厚岸印刷所雄別工場　田畑圭司郎

十勝沖地震に因る災害復興に際して

厚岸町長　岸田利雄

天災とは申し乍ら去る四日一もに順調に行い得ましたが突如発生致しました十勝沖地震に因る本町の被害甚大でありまして死傷者始め罹災の方々には誠にお氣の毒に堪えない次第であります。然し乍ら今次の災害は本町ばかりでなく各地に発生して然も惨憺の状況を極めておるのでありまして町全体として恒久対策を樹立致しまして着々復興計画遂行に努めつゝある次第であります。

何よりも先ず住宅を得ると同時に生業復興が緊急事でありますので極力此の方面に重点を置いて折衝致しております。

罹災者救恤につきましては早速関係機関の協力を得ますのでこれらの復興対策について全力を揚げて取りあえつゝある次第であります。

幸い今次震災害対策については政府も特に復旧対策に関し機関を設置して事急並しつゝあります上共に北海道においても勿論漁業團体金融機関等におきましても深い眞心を以て復旧の爲に盡力せられておりますから早期に生業復興が期し得られるものと確心致しております。

罹災の皆様には決して落膽することなく愈々復興生業確保のために努められます様希つて止みません。

玆に町報紙上を借りまして尊い生命を犠牲にされました死者の御冥福と傷者の快癒を祈り義捐金品醵出の方々及び御見舞を忝うせられた方々多数に対しまして萬腔の感謝の意を表しますと共に今後の復興のために更に関係方面の格別な御援助を特にお願い申し上げる次第であります。

津波床潭をのむ　死傷者二十名！

家を失い不安と寒さにおびえ　しんさいの夕日は今日も超えてゆく



×四日午前十時×
×二十五分ごろ××
×から數分にわ××
×たり襟裳岬南×
×方海上東経一×
×四三度三分北×
×緯四一度五分××
×を震源地とし××
×て東北海道東××
×部沿岸を中心××
×に上下動を伴××
×う强震そして××
×津波が襲い床××
×潭を中心にそ××
×の×惨事は刻々××
×と擴大していい××
×った

稀有の地震はレンガ建内壁を破りストーブを倒し火を呼び數分は悪夢の如く呆然として屋外に避難して見つめる一瞬の出來事であった。

落付きを取もどし屋内の整理に取りかゝろうとした午前十一時五分水平線を奔馬のように襲い狂う津波は一物をもまとめる暇さえなく小高い岡を目指して逃げながら泣呼ぶ避難民の中からわが子兄弟を探し求めたが後一部訂正されたが三月八日発表された。その岡から見下せば昨日現在まで判明したものは

死者　三名
小松英子(三才)父保田喜三郎(二五才)内田重軽傷者　十八名
財産の損害

区分	動力船	無動力船
船舶	三隻	三隻

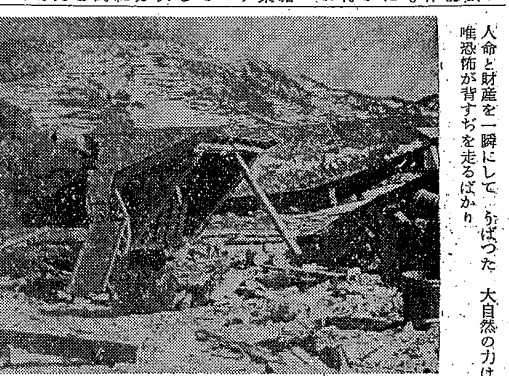
区分	延縄
副漁具	
その他	
合計	

区分	損害額
中小破損	三、七四四千円
大破流失	三、三〇〇千円

区分	損害額
水産製品	
家財具	
昆布	六、八〇〇千円
かき	七、六五〇
その他	三、六五〇
合計	九、六五〇

区分	損害額
その他	四、四四〇千円
区分	損害額
家財具	六、六二〇千円
漁業協組施設	四、九五〇
木材	九、九五〇

区分	損害額
炭がま	一、一三〇千円
尿溜(農業)	三、六二〇
サイロ	二〇〇
教育施設(学校など)	一〇、〇一〇
公共土木施設	四、八〇〇
その他公共施設	一、一〇〇
家屋	三、四四〇
商工業関係	一、〇〇〇
合計	二八、四二〇



人命と財産を一瞬にして、うばつた大自然の力は唯恐怖が背すぢを走るばかり

恐怖と失つた家に帰ることの出來ない罹災者とが小高い岡に不氣味な一夜をあかした

白原を灰色に染め屋根、船の間をぬつて調査は進められ、その状況は予想もつかないほう大な被害として三月八日発表された。その一部訂正されたが三月十日現在まで判明したものは

死者　三名
小松英子(三才)父保田喜三郎
三郎(二五才)内田
重軽傷者　十八名
財産の損害

区分	動力船	無動力船
船舶	三隻	三隻

区分	延縄
副漁具	
その他	
合計	

区分	損害額
中小破損	三、七四四千円
大破流失	三、三〇〇千円

区分	損害額
水産製品	
家財具	
昆布	六、八〇〇千円
かき	七、六五〇
その他	三、六五〇
合計	九、六五〇

区分	損害額
その他	四、四四〇千円
区分	損害額
家財具	六、六二〇千円
漁業協組施設	四、九五〇
木材	九、九五〇

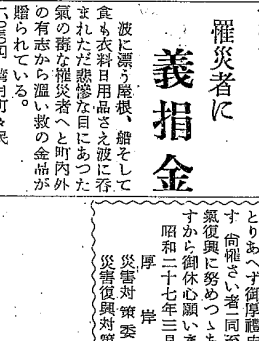
区分	損害額
炭がま	一、一三〇千円
尿溜(農業)	三、六二〇
サイロ	二〇〇
教育施設(学校など)	一〇、〇一〇
公共土木施設	四、八〇〇
その他公共施設	一、一〇〇
家屋	三、四四〇
商工業関係	一、〇〇〇
合計	二八、四二〇

痛々しい現場

中央政府などに反映

稀有の災害は　各方面のびこれに罹災町民として希同情と対策のために眞險に望を訴え実現のために陳情論議されているが　調査の諸願した概要次のとおりでために來町した主なる者及ある

月日	来町者	陳情請願事項
三六	松岡衆議院議員　二瓶　兒玉道麿	全般に亘つて陳情
三七	野田建設大臣（浜中にて）	上水道、菊地小学校復旧方について
三八	伊藤衆議院議員　二瓶道麿	右全じ
三九	山添農林次官	漁業復興資金融資方について
三九	坂井道教育委員	学校の被害復旧方に付て
三〇	農林省漁港課長　道港湾課長　釧路土木現業所長　開発局計画課長	漁業復興資金融資方　公共事業復旧方　牛業資金融資方
三〇	高倉、飯田、林衆議院議員　松浦参議院議員	漁業復興資金融資方　住宅復旧方　學校等の復旧方
三一	廣瀬参議院調査團（一行十七名）	漁業復興資金融資方　公共事業復旧方　住宅復旧方　學校等の被害復旧方
三三	衆議院議員調査團（一行十名）	右に同じ



三月六日緊急議會

三月六日厚岸町議會を緊急招集し、未だ恐怖からさめず混乱の現地床潭村に開合した。

仮設住宅

建築工事進む

予期せぬ震災は　一瞬にして住家倉庫納屋を流失全壊し牛壊大破は　材料騒騰により三月六日から補修工事に取かつていたが全壊流失の世帯に対しては應急の処置として二十戸（一戸六坪で十万円）を建築することの方針をもつて拓殖銀行を通じ融資を受け來庁中の道建築課及び支庁建築主事指導の下に請負者一名當原建築株式会社をとりかゝり着在させ建築にとりかゝり着々木の香も新しく慘事一色にぬりつぶした床潭部落に新生がよみがえりつゝあるなおこの資金は　国費全額補助を導入して行はれるのである

罹災者に　義捐金

波に漂う屋根、舩そして行衣料日用品さえ波に行まれただ悲慘な目にあつた氣の毒な罹災者へと町内外の有志から溫い救の金品が贈られている。

一、〇三〇円　湾月町々民
三〇〇円　若竹町々民
七、〇〇〇円　松葉町々民
一、四〇〇円　塚香町々民
一、三〇〇円　浜渡町（西部）町民
一、三〇〇円　弁渡町（東部）町民
四、九〇〇円　眞龍町（東部）町民
二、〇〇〇円　眞龍町（中部）町民
二、〇〇〇円　眞龍町（西部）町民
三、〇〇〇円　厚岸鶏合会
一、〇〇〇円　厚岸小學校
三〇、〇〇〇円　北海タイムス社
三、〇〇〇円　厚岸料理飲食麺類連合会
一、二五〇円　筑紫恋婦人部
三、〇〇〇円　筑紫恋部落
一、〇〇〇円　高橋哲弥
一、〇〇〇円　留崩町　武田　昇
一〇、〇〇〇円　釧路市日本ウメノナイト教会
六、〇〇〇円　眞龍婦人会一同
一、三〇〇円　眞龍町商店連合会
長
合計　五六八、四三五円
（三月十二日現在）

兩陛下から　御下賜金

天皇皇后兩陛下には此の度の十勝沖地震によつて蒙つた災害復興に深く御心を痛められ御内帑金を御下賜になり三月十四日佐藤助役が釧路国支庁長から傳達授受し速かな復興に努力して御心に副うべく御答へした。

謝罹災御見舞

今次の災害に際し逸早く御見舞激励を忝う致しました　更に多額の義捐金品も有難く受納記贈致しつゝあります一々趣御禮申上げるべきでありますが仍復興其の他に忙殺の現況でありますので甚だ勝手ですが本紙上からとりあへず御厚禮申上ます　尚恤さい者一同至極元氣復興に努めつゝありますから御休心願います。

昭和二十七年三月十日

厚岸町
厚岸災害対策委員会
災害復興対策本部

十勝沖地震に因る
災害復興計畫

厚岸町　災害復興対策本部

一、目的　十勝沖地震厚岸町災害應急救助は時間的に其の対策一段落の段階にあるが本災害をして速かに然も恒久的なふつこう対策を期する爲に本厚岸町災害ふつこう対策本部を設置せんとする

二、組織　本部に次の部を置いて部長が本部長の指揮によつてふつこうの速進を期する

部名　部務の概要

總務部　一、災害調査取纏め及びふつこう計画に関する事

二、部外との連絡に関すること

三、各部の調整に関すること

四、ふつこう費予算に関すること

五、厚岸町災害対策委員等に関すること

六、他部の主管に属しないこと

十勝沖地震厚岸町災害復興對策本部設置要綱

一、災害救助法の運用に関すること

二、救援物資法外義捐金品に関すること

三、罹災者生業資金資材の確保に関すること

四、被害商工業者の更生対策に関すること

ふつこう建設部

一、公共施設ふつこうに関すること

二、罹災者住宅対策に関すること

本部職員の編成

本部長　岸田町長

副本部長　佐藤助役　戸田收入役　矢本税務課長

總務部長　高橋總務課長　救恤部長　加賀厚生課長

生業対策部長　関川産業課長

復こう建設部長　加藤建設課長

外　各課員

四、本部はさい害ふつこうと本來の役場事務とを併せ行うもので役場機構に準じて編成す。依て両者共に遺憾なきを期して以てさい害ふつこうの速進を期するものとする尚税務課員支所職員は隨時臨機に本部の業務を担任する

（昭和二十七年三月十日施行。）

おそろしい日

床潭小六年　中村キヨミ

あの日、三月四日はとても暖かい小春日よりでした。誰があんな大きな恐ろしい地震と津波が來ると考えてもようど一時間目が終つた十時二十分頃突然ぐら〳〵と地震がきました。たいした事が無いと思たその時つづけさまに歩けない程の地震がきたのです。お友達は皆きやきやと言いながら逃げました。大丈夫だとゆう先生らしい声も聞えましたが、学校が今は倒れるか、今倒れるかと思つて靴もはかずに夢中で飛出しました校庭に出てからも、暫く校舎がゆれてたので私はすつかり、大きな學校がゆれているのを見ました。今考えてみてもこわくなります。やつと地震が終つたので親せきの家に行つて山に小屋を立てて避難ました、家に着いた時は本や帳面を教室に入つて片付けたいと思いました。私は お友達が何だか又地震が來るようでとても中に入る氣はしませんでした。男のお友達がまつているとも、先生がきて皆校庭に出る樣にと言いました。その時又ぐら〳〵と地震がきました。思わず飛出をうとした時校庭にいた友達の誰かが「津波だ」と叫びました。まさかと思つて海の方を見ると、村の人達が皆大声を出して逃げて行きます。私も皆と一緒に逃げまわけて、はだしの儘逃げました。前を走る人も後を走る人も誰が誰だかわかりません。後を振りかえると、私の家の脇から大きな発動機船が大きな波に浮されて「ごう」「ごう」と云う音と共にものすごい速さで來るのが見えました。「はつ」と思つた時私は何かにつまづいて駐在所の後ころんでしまいました。誰かが私の上を踏んで行つたような氣がしましたがすぐ飛起きて夢中で山に上りました。其の時はもう息が苦しくて何が何やらわかりませんでした。其の中に友達が皆集つて來ました。先生も來て居られます。其の時學校の方を見てびつくりしました。今まで立派に建つていた家がもうありませんと思わず私の家の方を見ると屋根が見えます。ほつと安心しました。私の近くにいたお母さん達は皆泣いています。私もお母さんがとても心配になりました。誰かに聞いてみようと思つた時「きよみ」「きよみ」と呼ばれて振りむくとお母さんが來ていました。お母さんの顔を見ると涙がこぼれそうになつた。そして良い所にお婆さんやおうちに連れて上つた。そしてお婆さんが「あゝ死んでおばさん、その隣りに死んでおいでかと思つてどんなにかわいそうだなあ」と言つてお母さんが不安でいました。私も靴をはいていませんでした。私はどうなるのかと思うととても悲しくなりました

夕方になつてお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちやくちやでした。障子は倒れ、壁はちこちに流れて布團も着物も食物も皆家の隅の方にかたまつています。勉强道具はとは思つてお母さんを見るとも何も言わずに氣の抜けたように立つていました。その夜は濡れない毛布等を持つて親せきの家に行つて山に小屋を立てて避難ました、寒い寒い夜でした。私は お友達の事を考えてみながら知らず知らずの中に寢てしまいました

地震と津波の思い出

床潭小四　菅谷健造

二時間がおわつたので、僕は靴下をぬいで、足をあぶつていたら急にがた〳〵と音をたて動く、それは地震であつた。その動き方というのはものすごく、僕は目が廻つた。目が廻つてはだしになつているのもしらずに大きな地震であつたから勉强道具を取りに入つた。道具を抱えて外にでて、地面が大きくゆれて少しも歩けませんでした。そのうちに地震も弱まつていつたので、先生方と地震の話をし合つて居たら、窓から飛び降りようと思つてやつて來た。走つて行つて見たら水桶はひつくりかえり棚からは物が落ちてるのを見てびつくりした。父さんが「健造地震が來たら逃げるんだよ」と教へてくれたころのを踏んで行つたような氣がしましたがすぐ飛起きて夢中で山に上りました。其の時はもう息が苦しくて何が何やらわかりませんでした。其の中に友達が皆集つて來ました。先生も來て居られます。其の時學校の方を見てびつくりしました。今まで立派に建つていた家がもうありませんと思わず私の家の方を見ると屋根が見えます。ほつと安心しました。私の近くにいたお母さん達は皆泣いています。私もお母さんがとても心配になりました。誰かに聞いてみようと思つた時「きよみ」「きよみ」と呼ばれて振りむくとお母さんが來ていました。お母さんの顔を見ると涙がこぼれそうになつた。そして良い所にお婆さんやおうちに連れて上つた。そしてお母さんが「あゝ死んでおばさん、その隣りに死んでおいでかと思つてどんなにかわいそうだなあ」と言つてお母さんは「なに泣かなくてもいい」と言つていた。夕方になつてお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちやくちやでした。障子は倒れ、壁はちこちに流れて布團も着物も食物も皆家の隅の方にかたまつています。勉强道具はとは思つてお母さんを見るとも何も言わずに氣の抜けたように立つていました。その夜は濡れない毛布等を持つて親せきの家に行つて山に小屋を立てて避難ました、寒い寒い夜でした。私は お友達の事を考えてみながら知らず知らずの中に寢てしまいました

地震と津波の思い出

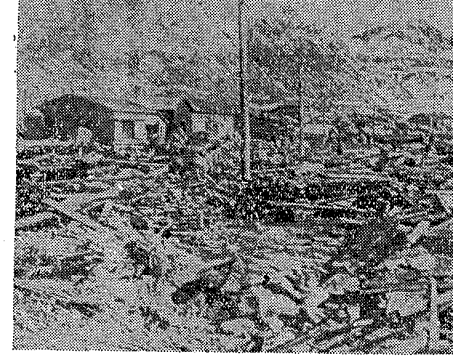
床潭小四　菅谷健造

二時間がおわつたので、僕は靴下をぬいで、足をあぶつていたら急にがた〳〵と音をたて動く、それは地震であつた。その動き方というのはものすごく、僕は目が廻つた。目が廻つてはだしになつているのもしらずに大きな地震であつたから勉强道具を取りに入つた。道具を抱えて外にでて、地面が大きくゆれて少しも歩けませんでした。そのうちに地震も弱まつていつたので、先生方と地震の話をし合つて居たら、窓から飛び降りようと思つてやつて來た。走つて行つて見たら水桶はひつくりかえり棚からは物が落ちてるのを見てびつくりした。父さんが「健造地震が來たら逃げるんだよ」と教へてくれたころのを踏んで行つたような氣がしましたがすぐ飛起きて夢中で山に上りました。其の時はもう息が苦しくて何が何やらわかりませんでした。其の中に友達が皆集つて來ました。先生も來て居られます。其の時學校の方を見てびつくりしました。今まで立派に建つていた家がもうありませんと思わず私の家の方を見ると屋根が見えます。ほつと安心しました。私の近くにいたお母さん達は皆泣いています。私もお母さんがとても心配になりました。誰かに聞いてみようと思つた時「きよみ」「きよみ」と呼ばれて振りむくとお母さんが來ていました。お母さんの顔を見ると涙がこぼれそうになつた。そして良い所にお婆さんやおうちに連れて上つた。そしてお母さんが「あゝ死んでおばさん、その隣りに死んでおいでかと思つてどんなにかわいそうだなあ」と言つてお母さんは「なに泣かなくてもいい」と言つていた。夕方になつてお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちやくちやでした。障子は倒れ、壁はちこちに流れて布團も着物も食物も皆家の隅の方にかたまつています。勉强道具はとは思つてお母さんを見るとも何も言わずに氣の抜けたように立つていました。その夜は濡れない毛布等を持つて親せきの家に行つて山に小屋を立てて避難ました、寒い寒い夜でした。私は お友達の事を考えてみながら知らず知らずの中に寢てしまいました

地震と津波の思い出

床潭小四　菅谷健造

二時間がおわつたので、僕は靴下をぬいで、足をあぶつていたら急にがた〳〵と音をたて動く、それは地震であつた。その動き方というのはものすごく、僕は目が廻つた。目が廻つてはだしになつているのもしらずに大きな地震であつたから勉强道具を取りに入つた。道具を抱えて外にでて、地面が大きくゆれて少しも歩けませんでした。そのうちに地震も弱まつていつたので、先生方と地震の話をし合つて居たら、窓から飛び降りようと思つてやつて來た。走つて行つて見たら水桶はひつくりかえり棚からは物が落ちてるのを見てびつくりした。父さんが「健造地震が來たら逃げるんだよ」と教へてくれたころのを踏んで行つたような氣がしましたがすぐ飛起きて夢中で山に上りました。其の時はもう息が苦しくて何が何やらわかりませんでした。其の中に友達が皆集つて來ました。先生も來て居られます。其の時學校の方を見てびつくりしました。今まで立派に建つていた家がもうありませんと思わず私の家の方を見ると屋根が見えます。ほつと安心しました。私の近くにいたお母さん達は皆泣いています。私もお母さんがとても心配になりました。誰かに聞いてみようと思つた時「きよみ」「きよみ」と呼ばれて振りむくとお母さんが來ていました。お母さんの顔を見ると涙がこぼれそうになつた。そして良い所にお婆さんやおうちに連れて上つた。そしてお母さんが「あゝ死んでおばさん、その隣りに死んでおいでかと思つてどんなにかわいそうだなあ」と言つてお母さんは「なに泣かなくてもいい」と言つていた。夕方になつてお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちやくちやでした。障子は倒れ、壁はちこちに流れて布團も着物も食物も皆家の隅の方にかたまつています。勉强道具はとは思つてお母さんを見るとも何も言わずに氣の抜けたように立つていました。その夜は濡れない毛布等を持つて親せきの家に行つて山に小屋を立てて避難ました、寒い寒い夜でした。私は お友達の事を考えてみながら知らず知らずの中に寢てしまいました



只メチヤ　メチヤという言葉に盡きる　誰が數分の出來事として想像されようか

募集

入学通知

洩れの方は

至急役場へ申出下さい

昭和二十七年度新入学期も近づいて來ましたが家庭では準備はもうよろしいでせうか。今年入學する該當者には個人別に入學案内をいたしましたが通知を受けていない方は至急役場迄御申出下さい。なお昭和二十七年度入學兒童の男女別及び前年との対比をしますれば

学校名	昭和二十七年度			昭和二十六年度		
	男	女	計	男	女	計
厚岸	四七	五三	一〇〇	九九		
床潭	一一	一〇	二一			
末廣	一四	一三	二七			
小島	一	二	三			
高知	五	二	七			
地龍	三	三	六			
眞龍	三	四	七			
門静	二	三	五			
苫多	二	二	四			
尾幌	一	二	三			
上尾幌	二	二	四			
計	一四八	一四一	二八九			

右の表のとおり昭和二十七年度は前年度と対比して三六名の減になつているがこれは終戦の年に生れた兒童で減になつたが昭和二十八年度から漸次增加されるものと思われる

岸田町長出札

今次耀さいの状況説明と今後の耀さいの対策に関し懇談開発局等にふつこう計画陳情十八日釧路市において開催の町村会に出席して

新聞紙

突如として悲惨な予測できない恐ろしさこれが天さいという本当の意味であると昆布と塩の香る悲惨な現場に立つて感ずるばかりである

◇　◇

海潮がど寸黒い白原の上に痕跡を殘し形をとどめなく流れた屋根、船　家財其の他全日正午から本町眞龍町を中心に所属民生委員を長として有志約百名の協力を得てそれ〳〵担任区域を定め青年よ、時を惜しめ

◇　◇

叱つたので、家康は『おうその一言こそ今日の一番にも優るぞ』と称讃したフランクリンの言葉にこんなのがあつた

『人生を愛するか、若し愛さば時を浪費するなかれ、時は人生を成す要素なればなり』

× × ×

時は正に三月……世に逡ろふ〳〵卒業生諸君よ寸時も怠にするなかれ

× × ×

青年よ、時を惜しめ

◇　◇

誰かいう「命さえあれば……」慘憺の後につきがちな勤倦も秩序も失われ頽落と頽廃が自滅へ導く幾代もの汗で築いた財産それは何ものにも替え難い尊統の財宝である　これを再び生かすものは力強い自立である

◇　◇

難を逃れた一万五千有余人は、昇天した貴い三柱のめい福を祈ると同時に溫い手と心　そして励の眼で心の連かなることを祈ろうではないか

トピック

我に十四才の歳　再びあらんや

—德川頼宥—

大阪夏の陣に、紀州頼宣が出陣した時、戦は既に終了して皆引き上げていた。頼宣は家康に向い『今日の合戦に後れたのは実に口惜しうございます』と云つて頭りに落涙したので、傍にいた松平正綱は『紀州様の御嘆きは尤もであるが、お年が若いのだから、今後御手柄をなされる時が沢山御座います』と云つて慰めた。すると頼宣は『正綱は不思議なことを云うぞ。我に十四才の歳が再び來るか』と

＜資料７＞　十勝沖地震の記憶　（床潭地区児童・生徒の作文）

『町報あっけし』第11号（昭和27年3月15日発行）の床潭地区児童・生徒の作文より
（※内容については、旧字体を新字体に変更するなど、一部、読みやすく改変・修正しています）

「おそろしい日」　床潭小学校六年　中村キヨミ

あの日、３月４日はとても暖かい小春日よりでした。誰があんな大きな恐ろしい地震と津波が来ると考えていたでしょう。

ちょうど一時間目が終わった10時20分頃突然ぐらぐらと地震がきました。たいしたことが無いと思ったその時つづけさまに歩けない程の地震がきたのです。お友達は皆きゃきゃと言いながら逃げました。「大丈夫だ」という先生らしい声も聞こえましたが、学校が今倒れるか、今倒れるかと思って靴もはかずに夢中で飛び出しました。校庭に出てからも、暫く校舎がゆれてたので私はすっかり、大きな学校がゆれているのを見ました。今考えてみてもこわくなります。

ようやく地震が終わったので机の上に、そのままにしていた本や帳面を教室に入って片付けたいと思いましたが何だかまた地震が来るようでとても中に入る気はしませんでした。男のお友達が皆中に入って、本などをしまっていると、先生がきて「皆校庭に出るように」と言いました。その時またぐらぐらと地震がきました。思わず飛び出そうとした時校庭にいた友達の誰かが「津波だ」と叫びました。まさかと思って海の方を見ると、村の人達が皆大声を出して逃げて行きます。私も皆と一緒に山をめがけて、はだしのまま逃げました。前を走る人も後を走る人も誰が誰だかわかりません。後を振りかえると、私の家の脇から大きな発動機船が大きな波に浮かされて「ごう」「ごう」という音とともにものすごい速さで来るのが見えました。「はっ」と思った時私は何かにつまづいて駐在所の後でころんでしまいました。誰かが私の上を踏んで行ったような気がしましたがすぐ飛び起きて夢中で山に上がりました。その時はもう息が苦しくて何が何やらわかりませんでした。その内に友達が皆集まって来ました。先生も来て居られます。その時学校の方を見てびっくりしました。今まで立派に建っていた家がもうありません。思わず私の家の方を見ると屋根が見えます。ほっと安心しました。私の近くにいるお母さん達は皆泣いています。私もお母さんがとても心配になりました。誰かに聞いてみようと思った時「きよみ」「きよみ」と呼んだので振りむくとお母さんが来ていました。お母さんも靴をはいていませんでした。私はどうなるのかと思うととても悲しくなりました。

夕方になってお母さんと家にきてみると外はなんともないが中はめちゃめちゃでした。障子は破れ、畳はあちこちに流れて布団も着物も食べ物も皆家の隅の方にかたまっています。勉強道具はと思ってお母さんを見ると何も言わずに気の抜けたように立っていました。その夜は濡れていない毛布等を持って親せきの家に行って山に小屋を建てて寝ました。寒い寒い夜でした。私はお友達のことを考えてみながら知らず知らずのうちに寝てしまいました。

▌「地震と津波の思い出」　床潭小学校４年生　菅谷健造

２時間がおわったので、僕は靴下をぬいで、足をあぶっていたら急にガタガタと音をたてて動く。それは地震であった。その動き方というのはものすごく、僕は目がまわった。目がまわってはだしになっているのもしらなかった。ようやく終わったから勉強道具を取りに入った。道具を抱えて外にでていったら家がどうなっているかということが心配になってきた。走って行って見たら水桶はひっくりかえり棚からは物が落ちているのを見てびっくりした。父さんが「健造、地震が来たら逃げるんだよ」と教えてくれた。学校のグランドに来て見たら先生が「もうなんともないだろうから中に入ろう」とおっしゃったその時「津波だ」と誰かが叫んだ。僕はそれっと逃げ出した。見る間に家は倒れてしまった。僕は途中まで行くと家の父さんや兄さんのことを思い出して今頃どうしているのかと思っていたら、母さんが火葬場の所に来ていた。皆が走れ走れと言うので、こわいのを我慢して走った。だけど勉強道具だけは、はなさなかった。海の方を見たら家が２、３軒倒れたようだった。山の登り口に家の八十七のお婆さんがすわっていたので下りて来て連れて上がった。そして良い所にお婆さんをすわらせた。その隣りにどこかのおばさんが「あぼ死んでかわいそうだなあ」と言っていた。うちの母さんは「本当に気の毒だねぇ」と言った。そして、おばさんは「のり子、お前の家はないんだ、どうするの」と言ったら、久保田ののりちゃんは「くすん、くすん」と泣き出した。母さんは「なに泣かなくてもいい」と言っていた。ちょっとしてから、しまださんの父さんが「おばさん、健造、うちのこのむしろの小屋に入って寝れ」と言ってくれたので僕はうれしくてたまらなかった。

急ごしらえした小屋があちこちにできはじめました。

▌「災害に寄せて」　床潭中学校２年　多田武義

３月４日、ちょうど時間は10時25分頃でした。僕らが数学の授業をしていた時、突然地震がやって来た。

僕の後の磯田君に「地震でないか」と聞いた時はもうすでに大きな地震があった。窓から飛び降りたが地震はますます大きくなった。僕は家に帰ろうと思って歩いたが、地面が大きくゆれて少しも歩けませんでした。そのうちに地震も弱まっていったので、先生方と地震の話をいろいろと話し合っていたら、また地震がやって来た。窓から飛び降りようと思って窓に上がったら、すでに校庭の近くに津波がやって来ていた。はだしで逃げては雪があるので、冷たいと思って玄関に長靴を持って出たら、もうすでに家が2、3軒流されていた。それを見た僕は驚いて走れなかった。住宅の方に向かって走ったのだが、波はすでに橋をこえて来た。住宅の方に走れば波にあうと思って、また思いなおして皆の方へ逃げた。皆川さんの方へ走っていったが、途中何回転んだかわかりません。皆川さんの山に上って下を見おろしたら船が２、３艘沼の上に押し流されていた。それを見た僕は驚いてその場で少し休んでいたら、皆が「帰る、帰る」と言うので先生の許しを受けないで家に帰った。家には母や子供達が山に逃げて誰もいなかった。兄さんは町に出て今帰ったばかりなので、家の様子はまだ知らないようだった。兄さんと僕と二人で家の中を見たら、あまりのいたましさに涙がこぼれそうになった。家の中には雪が畳の上に約２尺位も流れ積もっていた。そうこうしている内に日は暮れかかっていた。我が家は外以上にすごく荒れていて、二目と見られない姿になってしまった。家の中で寝ることもできず山に小屋を建てて野宿した。その夜は昼の津波のことを話し合って過ごし、少し休んだが寒くて眠られない。山の下で明け方の静けさを破って元気よく鶏が鳴き出した。小屋の隙間から空を見たら、東の方が白々と明けかけていた。近くでストーブをたいているのか、近くの辺りの小屋から煙がはき出ていた。

今思うとあの時のことがいろいろと思い出され、ぞっとするくらいである。



十勝沖地震（昭和27年３月４日発生）**に伴う**
厚岸町床潭地区の津波被害聞き取り座談会記録報告書

発　行　令和２年３月
発行者　北海道厚岸町教育委員会